

---

# 異世界

刹音

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界

### 【Nコード】

N2393M

### 【作者名】

刹音

### 【あらすじ】

突然部屋に出た謎の少年に強制連行され、連れて行かれた世界。その世界で優空を待っていた真実は。

## 第一話

窓の外から小鳥の鳴く声が聞こえる。

カーテン越しに暖かい日差しが私の頬を照らす。

今日はとてものかな日曜日。

心身ともに疲れる学校に行かずに家の中で体を休めることができる大切な休日。

あー。出来ることなら明日も明後日も日曜日ならいいのに。

まあ、現実的に無理な話なわけで。

私はベットの一人で起きることもせずにグダグダと時間を過ごしていた。

しばらくすると、階下からお母さんの声が聞こえた。

「優空<sup>ゆう</sup>起きなさい。もう朝よー」

モゾモゾと手だけ動かし頭上の棚にある時計を掴んだ。

今の時刻・・・10:56分。

・・・母さんや・・・今の時間は朝ですかい？

心で突っ込みつつ、もう少し寝ていたいと訴える心に鞭を打って私はベットから起き上がった。

着ていたパジャマを脱ぎ捨て、ついでに下着もとっかえる。クローゼットの中からガサゴソと目当ての洋服を見つけ、引っ張り出して装着。ついでにヘアブラシで腰まである長い髪の毛を丁寧になでる。ヘアブラシでなで終わったら今度はクシに変えて髪の毛を上から下まで

「優空あ！朝って言うてるでしょう！起きないと朝ごはん抜きよ！  
！！」

お母さんの怒鳴り声が廊下から響き私の部屋に入ってくる。

時計を見ると11:22分を示している。呼んでもなかなか降りてこない私にお母さんが痺れを切らしたらしい。

この間もそういわれて本当にご飯を抜きにされてしまった。

私は慌てて部屋を飛び出し階下へと向かった。

## 第一話（後書き）

こんにちわ。 刹音です。

今回初めてファンタジー？に挑戦してみました、ノリで書き始めた小説でこの先どうなるか私にも分かりません。  
長い目で応援よろしくお願いします。

## 第二話

リビングではお母さんが台所でお皿を洗っていた。

「お母さんおはよ」

「優空おはよう。朝食もう置いてあるわよ」

この母は何が何でも朝を通したいのだろうか。

一人肩をすくめながら椅子に座った。テーブルの上には朝食が並べられていた。

んー。今日の朝食とやらは・・・ご飯、目玉焼きにタコさんウィンナー。それと・・・何でしょうかねえこれは。

「あの・・・。お母さん？」

「なあに？」

「この・・・なんと表現したらよいか分からない液体はなんでしょうか？」

私はさも当然とばかりに食卓の場に置かれている、コップに入った液体を指差した。

「何って。ただの飲み物じゃないの」

ただの飲み物？これが？

私の指差した液体は灰色に染まり濁っている。しかもよく見ると赤い・・・果肉のようなものまで浮かんでいる。これが本当にただの飲み物だというのか。

「・・・この飲み物は・・・お母さんの手作りでしょうか」  
「何言ってるのよ。当たり前じゃない」

ああ、やっぱり。

「・・・で、何と何を混ぜたら・・・こんな物になるの?」

「んつと。冷蔵庫の残り物」

「はぁ!?!」

「だってえ。そろそろ傷んできてたし」

本当に・・・何を混ぜたのか気になる。

しかし、お母さんに聞いても冷蔵庫の残り物で終わるのだろう。きつとあるものを適当にミキサーで混ぜ合わせたのだ。ってか、そもそも痛んだ残り物のミックスジュースを娘に飲ませるか普通。いや・・・それよりも確認しなきゃいけないことは・・・

「お母さん。この液体飲まなきゃだめ?」

上目遣いで尋ねてみる。だが、お母さんからの返答は冷たいものだった。

「当たり前でしょ。残したらもつたいないじゃない」

お母さんが飲め!と、つい言いかけた言葉を飲み込み、代わりにがつくりと肩を落とした。

いつまでもそうしているわけにも行かず、私は考え直してくれないかな、と仄かな期待を込めてチラリとお母さんを見た。そこには飲めオーラを発しているお母さんが一人。

・・・目が怖いデス。

仕方ないというふうに優空は液体を見つめた。しばらくその液体をにらめっこしていたが、お母さんの視線に耐え切れず、恐る恐るその液体に手を伸ばし、口に運ぶ。

「~~~~~!?!?!?!?」

不味い不味い不味い不味い!! ありえないほどに不味い!!  
今まで生きてきた16年の中で飲み込めないほど不味い液体なんて初めてだよ!?

こんなにも不味いものでも、飲まなかったら何を言われるか分からない。

優空は口元を押さえ、必死でその液体を飲み込もうと頑張った。  
しかしついに我慢できなくなりダッシュでトイレに駆け込む。

しばらくしてトイレから戻ってきた私を見てお母さんは笑っていた。

「優空は断ることを覚えなきゃね」

ああ。お母さんの背中に黒い羽が・・・。

そんな幻覚を感じつつ、私はテーブルに戻り手をつけていない朝食・ていうか昼食を口に運んだ。

もちろんお母さんが笑顔で進めるあの液体を断固拒否して飲まなかったのは言っても無い。



### 第三話

+++

「・・・はあ」

優空は自分の部屋に戻るための階段を上りながらため息をついた。理由はお母さんのせいだ。あの性格は天然なのか計画なのかまったく分からない。いや・・・あれで天然といったならこの世界のどれだけの人が天然に指定されてしまうのだろう・・・。

くだらないことを考えながら部屋の前まで着いた優空は特に何も考えることなくドアを開けた。

ドアを開けた先・・・自分の部屋の中には私と同じ年くらいの少年がいた。何で・・・？

「・・・」

「・・・」

部屋の中にいた少年と見詰め合うこと数秒。

「・・・失礼しました」

パタン・・・と、逃げるように優空はドアを閉めた。

・・・落ち着け、自分。さっきの液体には幻覚作用があるんだ。

そんなことを本気で思ってる時点でどうかと思うが、それで無理やり自分を納得させてもう一度何事もなかったかのようにドアを開け

た。

「・・・・・・」

「・・・・・・」

やはり、居る。いや・・幻覚だから見える??

いやいやいや。突っ込むべきところはそこじゃないだろ自分。

優空は一つ大きく深呼吸をして、その幻覚をじつと観察した。

座っているから身長は定かではないが、私よりも上だと思う。男のわりに整った顔で、色白な肌。黒々とした髪を肩ほどまで伸ばして、一言で言えば結構かつこいい・・王子様系の幻覚だった。

「幻覚にしとくの惜しいな」

「誰が幻覚だ」

「なっ・・・・!?!」

驚いた・・。幻覚が喋った!!

・・。事実は小説よりも奇なり・・・・か。

「おい。俺はお前に用があるんだ」

幻覚はスツと立ち上がり私の方に近づく。幻覚なのに歩くことまで可能なのか。と、感心して見ているといきなり手首をつかまれた。

「・・・・っ・・・・痛・・・・」

げ・・・・幻覚って・・・・こんなにも凄かったのか・・・・。

じつと少年の幻覚を見ていると、その幻覚はいぶかしむように眉を

よせ私に尋ねてきた。

「お前が・・・本当にレーギス様なのか？」

・・・・・・はあ？

何が言いたんだこの幻覚は。レーギス？？何それ？？？

きつと私の頭にハテナマークでも浮かんでいたのかもしれない。幻覚はあきれたようにため息をつき、私の手を離した。

「・・・何かの間違いか・・・いや・・・しかしそんなことが・・・」

ブツブツと何かを言っている。

・・・大人気ないとは思う、が。その態度にちよつとムカツ。人の部屋に勝手に現れた幻覚のくせにチラチラこつち見て深くため息をつくなんて考えられない。常識を考えてありえない。・・・幻覚に常識を求めてもいけないのだろうか。悩んでる私にいきなりその幻覚は声をかけてきた。

「おい、そのの」

はい？いきなり私のことを「そのの」と呼ぶんですか。本当に・・・幻覚のくせに生意気な！！！！

心で落ち着けと何回も唱えたが、もう遅い。アレだ。俗に言う堪忍袋の尾が切れたって感じ。

気づいたら私はその幻覚に向かって大人気なくも怒鳴ってしまった。

「あ・の・ねえ！なんで私の幻覚なんかに‘その’呼ばわりされなきゃいけないわけ？私にはね、歴とした優空って名前があるのよ！……私の幻覚のくせに生意気な口利いてんじゃないわよ……」

一気にまくし立てたせい、すこし息が切れるのを感じた。

部屋の中には私の荒い呼吸音のほかに音はなくなりシンとした静寂の空間を作っていた。

その空間を壊すようにしてその幻覚は言った。

「……喚くな」

## 第四話

その声がとても静かで冷たかったから、私は一瞬だけ本当に怖くな  
った。

でも、結局は幻覚。怖気づくことなんてない。だから文句の一つで  
も言っただろうとした、その時。

「優空？ 何大声出してるのよ。近所迷惑でしょ？」

お母さんの声が聞こえた。階下からじゃない。部屋の前からだ。

・・・って、ちょっと待て、いつ部屋の前に来たのだ。

「もう。なんで無言なの？ 入るわよ」

「だっ・・・」

駄目！と言おうとしたがもう遅い。お母さんはすばやくノブを回し  
ドアを開けると、ツカツカと私の部屋に入ってきた。

部屋の中には私と少年。年頃の娘の母がそんな状態を見たら何を思  
うのか。

「あ・・・あの・・・これには事情が！！」

あわあわと言いつつ訳を考えていたが、すぐに気づく。

そう、少年は私の幻覚のなのだからお母さんに見えるわけがない。

この部屋には私だけで、ほかに何もなかったことを確認したお母さんは  
私に二言三言小言を言って部屋を出て行くのだ。

よかったあ、と一安心した私は、お母さんが小言を言って去るとき  
を待った。

すぐにお母さんが私に話しかけてきたが、内容は私の期待したもの

とは大幅に違っていた。

「あら。お友達が来ていたのなら行ってくればよかったのに」

・・・え。

「お・・・お友達？」

私は冷や汗をかくのを感じながらお母さんに聞いた。お母さんは何言ってるのという風に私を見た後、幻覚を指差して、お友達でしょ？と、逆に問いかけてきた。

なんでお母さんに私の幻覚が見えるの？

いや、それよりも、こんな口の悪い幻覚とお友達だというのを訂正しないと！

もつと考えることがあったはずだが、そこまで頭が回らなかった私はすぐにお母さんに訂正を入れようとした。だが、私がお母さんに訂正しようとはなしかけるよりも早く、幻覚はお母さんに近づき深々と頭を下げた。

「はい。僕は学校の友達なんです。今日は勉強を教えるために来たんですよ。でも僕の教え方が悪かったのか彼女が怒ってしまっ・・・。迷惑をかけました」

いきなり何言い出すんだこの幻覚は！普通信じられないでしょ！いろいろ疑問点が・・・

「まあ、優空に勉強を教えてくれてたのね。いつも勉強しない子だから困ってたのよ。この際だからみっちり勉強教えてあげてくれるかしら？」

・・・信じちゃった。

「はい。そのつもりです」

幻覚にいらないうことを喋って勉強を見るように頼んだ天然のお母さんに、大丈夫ですよとでもいうかのように微笑んでいる少年。その微笑みはまるで天使のようだった。

女の私よりも絶対に可愛いぞ、あれは。

優空は少しむっとしながら、楽しそうに話す二人の会話を聞いていた。

その会話の内容でお母さんの天然ぶりは異常だということが改めて確認できたとして、私がびっくりしたのは幻覚のほうだった。先ほどまであんなに口が悪かったのに、今では優等生のように優しい口調でお母さんと話をしている。

・・・この幻覚・・・二重人格かよ。

優空は二人の会話を聞きながらそう一人そう考えていた。

## 第五話

+++

数十分あの二人話していただろうか。ようやくお母さんは私の部屋を退出した。すると、先ほどの賑わいとは打って変わってまた静寂な空間がうまれた。

・・・なんか、気まずい。けど、私がどうにかしなきゃいけない問題じゃないよね。

あくまでも幻覚は幻覚。本来一人しかいない部屋は静かで当たり前なのだ。

私はふうつとため息をつきながら近くの椅子に腰掛けた。すると、それを見計らったかのように幻覚は話し出した。

「横槍が入ったな。まあいい。俺はお前に用があるんだ」

さっきまでの優等生な口調と天使の微笑みはそこにはなく、冷たい目が私をとらえているだけだった。

「・・・」

その目があまりにも冷たく、冷酷なものだったから、私は何も喋ることができなかった。

「そう。黙って聞いていてくれれば良い」



そう言つて、幻覚は私の足元を指差した。

「その箱を取つてくれないか。お前さっき何か喚いてとらなかつただろ」

私が足元を見ると、そこには半透明のオルゴールのような形をした箱のようなものが転がっていた。

ああ。あのときの「その」は私のことじゃなくてこの箱を指していたんだ。

私はそれを拾い上げ幻覚に渡した。幻覚は一言ありがとうといって箱を受け取った。

・・・お礼とか・・・いえるんだ。

私は少しだけ驚いてしまった。そんな私を気にする様子もなく幻覚は箱を弄びながらたんと話し始めた。

「一言先に言つておく。もう分かっているだろうが、俺はこの世界の人間じゃない」

ええ。分かっていますとも。君は私の幻覚・・・。

「・・・幻覚でもないからな」

まるで私の心を読んだかのように「自分は幻覚じゃない」と言った。幻覚じゃないなら、なんなんだ？と、当惑顔の私を見て目の前の幻覚・・・じゃなくて少年はため息をついた。少年からしてみれば今までのことを直接近くで見えていて、未だに幻覚だと思うような人間がいたことに呆れていたのだ。

「・・・俺はクリュスタルスという世界から来た。理由はフィーリア様の妹君、レーギス様を連れ戻すためだ」

この人の頭は大丈夫だろうか。

私には、さらつとありえない嘘を言う少年の頭が心配だった。しかし、異世界の人だというのならいきなり私の部屋にいたことには説明がつく。

でも、仮に本当の事を言ってるにしても・・・分からない。それがそうして私とつながるのか。それならこんなところにいないですぐにそのなんたら様を連れ戻せば良いだけだ。私が関係してくるところなどどこにもない。

「あの、それって私関係ないよね？なんたら様なんてここにいないし」

「なんたら様じゃない。レーギス様だ。いいか？俺が関係ない場所に来ると思うのか？」

そう聞かれても、君のことよく知らないし。

私は目をつぶって今までのことを思い返す。この部屋で少年と会って1時間弱ほどの時間しかたってないが、自分の目的に関係ないところで道草を食うようなやつじゃないことには気づく。

「よく聞け。レーギス様は幼い時にクリュスタルスからこの世界へと産み落とされた。意味が分かるか？」

まったくもって分からない。分かったことといえば、この少年は態度が悪く、私を上から目線で見ているということだけだ。

私の顔を見てそれを悟ったのだろう。少年は眉間にしわを寄せながら言った。

「俺のように異世界から異世界へ飛んだわけじゃない。レーギス様はこの世界で産まれたんだ。・・・少し意味は違うが・・・生まれ変わりといえわかるだろう?」

ここまで聞いて、さすがにちょっとした予感がした。まさか・・・という思考と、そんなことありえない。という思考が頭の中を支配する。ただの予感なのだが、いやな予感ほど当たるものなのだ。今回のいやな予感もその例の通りだった。

「つまり、お前がレーギス様なんだ」

## 第六話

少年は私の顔を見て真顔で言った。私の目を見つめるその瞳を見れば嘘を言っていないことは容易に分かった。ただ、私はそれを認めることができなかった。

「あ、ありえないでしょ。それに私、レーギスって名前じゃなくて・  
」

「優空はこの世界の名前だろ。この世界の名前など関係ない」

その言葉に、ちょっとだけムツつとなった。産まれた時に私に与えられた名前を否定することは、私自身をも否定されているようでない。

「私の名前は優空だよ。私にとってはレーギスって名前のほうが関係ない」

私の言葉に少年は黙った。先ほど言った言葉が失言だったと分かったのだろ。少年はしばらく黙った後、ゆっくりと口を開いた。

「・・・とにかく、俺はお前を連れて行く義務がある」

そう言う少年の口調はどう聞いても上からものを言っている感じでイラッときたが、その少年の目はどこか儚げで困っているようにも見えた。

そんな顔を見てしまったから、私は何も言い返すことができず、黙って少年を見つめた。

「異世界の人間に口で言っても無理だろうな」

少年は先ほど私が拾い、手渡した箱を私の手に持たせた。

「??？」

もちろん、私に少年の意図が分かるはずもない。  
私は箱を手に持ったまま、少年の行動を待った。

「その箱はフェネストラというんだ。箱を開ければ俺の暮らす世界、クリスタルスが見える。俺の今までの話を信じる、信じないかはそれを見て決めろ」

少年が話し終えた後、私は自分の手元の箱を見つめた。そして、その箱をゆつくりと開けた。

瞬間、箱から白い光があふれ出し、あっという間に私の部屋を包み込んだ。見渡す限り白白白。家具なども見当たらず、その白の空間には私と少年しかいなかった。

「どうなってるの？これ」

「黙ってる。そのうち分かる」

少年は私の顔を見ず、まっすぐに前だけを見て返事を返した。  
それ以上何かを言っても無駄だと悟った私は、少年の言う通りに黙り込んだ。少年の言うことを聞くのには抵抗があるが、ここでうるさくしてはどうなるか分かったものじゃない。せめて、文句を言うのはこの白い空間から開放された時にしたほうが賢明だろう。

そんなことを考えつつ、しばらく待っていると白い空間にいつせいに色がつき始めた。

息を吞んでその光景を見ると、その色はある景色を映し出した。

「・・・これは」

「これが・・・俺たちの住むクリュスタッルスだ」

その景色はとても寂しかった。

空は薄い灰色に染まり、地面には草木がところどころにしか咲いていない。

「・・・なんか、寂しいところだね」

「昔はこんなふうじゃなかった。もつと綺麗な場所だったんだ」

私の言葉に、少年は少しうつむき加減に言った。その少年の姿がこの景色と同じく寂しげで、私はそんな少年の姿を見たくないと感じながらも、少年から目を離すことができずにいた。

私の視線に気づいたのか、少年は顔を上げて私のほうを見た。私は何を話せばいいのか咄嗟に考えられず、黙って少年を見つめ返していた。

少年はそんな私を見て、フツと笑った後、私の手の中にある箱をゆつくりと閉じた。

箱を閉じると白い光が出てきた時と同じように、目の前の景色は箱の中に吸い込まれ、私は何の変哲もない自分の部屋の中に立っていた。

しばらくその状態でボーっとしていると、少年がすかさず私に聞いてきた。

「どうだ？信じる気になったか？」

信じる？信じないと、問われれば信じるというしかない。あんな

ものを見せられて、信じないなんていえるわけがないのだ。  
沈黙は y e s と捉えられ、少年は私に言った。

「じゃあ、お前には今から俺とクリュスタルスに行ってもらおう」

## 第七話

なにが「じゃあ」なのか教えてもらいたい。

確かに私は少年の話を信じた。でも、いく行かないかは……。

「あのさ、確かに君たちの世界があることは信じるけど、私がレーギスって証拠があるの？」

「無い」

無いのかよ!!!

「なら、私がレーギスっていうのは何かの間違いじゃないの？」

「それは分からない。確かにお前のはずなんだが……」

少年はチラツと私を見て、深く深くため息をついた。

ああ。この反応何回目だろう……。やっぱムカツクー！

「が、何なのよ？」

言葉を切った先が気になり、私はその先を言うように促した。少年はやれやれというふうに肩をすくめていた。

「俺ははつきり言って、お前がレーギス様だとは信じられない」

「当たり前でしょ！私はレーギスじゃないもん。でもその信じられない理由って何さ？」

「……まず、レーギス様はともおしとやか、物腰柔らか、言葉遣いも申し分ない人だったのだが……お前はガサツ、暴言吐き、短気……などなど。全然似ていない」



初対面のやつにここまで言われる筋合いは無いのだが、確かにそれは当たっていて何も言い返すことができない。

「・・・でも」

少年はビシビシと言っていた口調を和らげ、やさしい口調で言った。

「お前から感じるその雰囲気は、レーギス様に近い」

そのあと少年は馬鹿なことを言ったな、とフツと笑った。その笑い方は自分を自嘲するような笑い方で見てて気分のいいもののはずは無いのだが、その笑い顔を見ると、不思議と鼓動が高鳴るのを感じた。

「・・・話が流れたな」

「う・・・（チツ）」

「とにかく、お前はクリスタルスに行ってもらおう」

少年の目に凄みがあり、私が何を言っても無駄だと言つことを示していた。

それでも私は最後まで抵抗を試みる。

「嫌。私は行く必要ないでしょ」

「必要あるか無いかは俺が決める」

「絶対に嫌!!」

しばらくはその言い争いが続いたが、やがて少年はふうつとため息をついて言い争いの場を降りた。私は一瞬本当に少年が諦めたのかと思ひ、嬉しさと呆気なさが入り混じった不思議な感情を抱き少年を見つめた。

しかし、もちろんのこと少年が諦めてくれるはずも無い。

「・・・仕方ない」

少年は私に一步一步近づいてくる。それに合わせ私も一步一步あとづさる。

背中がガンッと硬いものに当たった。部屋の壁だ。もうあとづさることはできない。それでも少年は私に近づいてきて、私は完全に逃げ道を断たれてしまった。

どうしようと考えていると、ふいに少年が私の手をつかんだ。

「な・・・何するのよ」

同年代の男の子に手を握られることが初めてだった私は、不本意にも少年にドキドキしてしまった。少年が握る手から私の鼓動が伝わるのではないかと言うほどに、心臓がうるさくなっている。

・・・落ち着け、落ち着け、私の心臓っ

必死で落ち着きを取り戻そうとしている私に、少年はさらに追い討ちをかけた。少年は握った私の手を引き、私を抱きしめてきたのだ。

「ちょ・・・っ!」

少年の体温が布越しに伝わってくる。私の心臓はさらにうるさく早鐘を打った。絶対に聞こえてしまっている・・・恥ずかしさで胸がいつぱいで少年を突き飛ばすことなどを考える余裕も無かった。少年はさらに私をギュッと抱きしめた。

・・・心臓が・・・っ／／／

私の意志を反して早鐘を打つ心臓が少し恨めしい。

このままでは、心臓が壊れてしまう！そう本気で思ってしまうほどに心臓がバクバクといていた。

それでも私は心臓の鼓動を平常に戻そうとつとめた。しかし、そう簡単に戻るとは思えなかった。そのとき、少年が私の耳元で囁いた。

「  
」

その言葉は私には聞き取れなかった。だが、なんとなくいやな予感がした。気づくと、体が熱くなるほどに早鐘を打っていた私の心臓は通常よりもゆっくりのペースで動いていた。

そつと少年の顔を見上げると、何かをやり遂げたような顔でうつすらと笑みを浮かべているように見える。

「ちよつと、今、いつたい・・・」

言い終わらぬうちに、私の部屋に異変が起こった。私のすぐ後ろにある壁が大きく黒い口を開いたのだ。顔を後ろに向けて確認すると、それは穴のようでもあった。

さきよりも強いいやな予感がひしひしと伝わる。そして、例のごときいやな予感ほど当たってしまう。

そう。少年は私を抱きしめた格好のままで、何のためらいも無く穴の中へと身を投げ入れたのだ。

## 第八話

どれくらいの時間が経っただろう。頭がぐるぐると回るような感覚がして気持ち悪い。

チラリと目を開けると、私のあまたの状態と同じようなぐるぐるな空間が辺りに広がっている。未だに入った穴から出ていないらしい。

「ねえ、いつになったら着くのよ？」

「もうすぐだ」

「一時間くらい前も同じこといわれたんだけど」

私の反論に少年は黙った。

こうなると、少年はしばらく口を利いてくれない。

私は、はあっとため息つきながらぐるぐるとした空間を目に入れなように目を閉じて、穴の中から抜けるのを待った。

「着いた」

ふいに少年の声がしたかと思うと、急に目の前が明るくなった。目を閉じててもまぶしいと感じるほどのその明るさに、強く強く目をつぶり手で目を覆った。

・・・よし。これならまぶしくない！

そう考えた、丁度その時。いきなりの浮遊感が私を襲った。いや・・・浮遊感と言つか、ポイツと投げ捨てられるような感覚に近い。

「~~~~~!!」

叫ぶまもなく、私たちは空を飛び・・・落ちた。  
ドスンという大きな音があたりに響く。打ち付けたお尻がジンジンと痛んだ。

うう・・・と、半泣きになりながらもチラリと横目で少年を見ると平然と立ってこちらを見ていた。

「お前・・・運動神経無いな」

「もつといたわる言葉無いのか！」

あー、もう。何でこんなに嫌な奴なんだ！

私はわざと大きくため息をついて地面から立ち上がった。そこで初めて、今いる場所がいままでとは違う世界だと気づいた。

空は白と灰色が混ざったような色で濁り、ところどころにある濁りの切れ端からすみれ色の空間が顔をのぞかせている。地面はあちこち浅いひび割れができていて、草木はまばらしかない。

この景色を私は知っていた。

あの箱・・・フェネストラとかいうやつで見た景色とまったく同じだった。ということは、ここが・・・

「クリユスタツルス？」

「そうだ。ここが俺の住む世界、クリユスタツルスだ」

私の問いかけに少年はすぐに答えてくれた。そして、この世界がなぜこうなったかをたんと語りだした。

少年が話している間、私は始めてくる世界に興味を持ち辺りを見回していた。だが、360度どこを見回してもさびしい景色が続いているだけだった。

そのとき、遠くのほうになにかが光っているのを見つけた。私は目

を細めてその光を見つめた。

しかし、距離が離れているためかよく見えない。

「人の話を聞いているのか？」

私の意識が別のものに向いていることに気づいた少年は私に問いかけてきた。そして、すぐに私が見つめているものが何なのか気づいたのだろう。

少年は私が見ているところを指差して言った。

「今からあそこに向かうんだ」

「え」

私は光るものから目を離して少年を見た。

少年は私をじっと見て、同じことを繰り返した。

「今からあそこに向かうんだ」

指はしっかりと光っている場所を指す。

無理だ。と私は思う。なにせ距離がありえないほど離れているのだから。しかし、少年は目で早く行くぞという気迫を放って私をにらんでいた。

だが、私のことは私が一番わかっているつもりだ。私にあそこまで歩いている気力と根性は持ち合わせていないのだ。

「あのさ、現実を見ようよ！ここからあそこってめっちゃ離れてるじゃん」

「そうだな」

「あ、何か魔法みたいな使うとか？それでバビューンと・・・」  
「使わない」

「・・・歩いてくの？」

「当たり前だろ？」

私の歩きたくないという願いを込めた言葉は、少年の冷たい言葉に簡単にあしらわれてしまった。

ハアツとため息をついてもう一度目指す場所を見る。

・・・やつぱり果てしなく遠い。

いつまでも渋っている私に痺れを切らしたのか、少年はいきなり私を抱きかかえ、まるで荷物を持つように肩にかついだ。

「うひゃああ！？な・・・にすんのさ！」

「うるさい黙れ。喚くと落とす」

「落とす！？降ろすじゃないの！？」

「・・・うるさい」

喚いていないと、いきなり早くなった鼓動を聞かれるのではないかと気が気でなかった。この鼓動が聞こえないようになるなら落とされてもいいからとも本気で思う。体中が熱くて、とにかく早く降ろしてもらえるようにギャーギャーと喚いた。

しかし、喚けば喚くほど少年の周りの空気は暗黒化していくのを感じる。このままでは、ただ落とされるどころか落とされるにプラスしてなにか嬉しくないオプシヨンがつきそうだ。

私は泣き泣き今の状況を受け入れ、少年の肩の上で少しでも鼓動が平常に戻るように深呼吸を繰り返していた。

## 第九話

+++

少年の肩に乗せられて暫くジツとしていたが、時間が経つにつれて腰辺りが痛くなってきた。

伸びをしようにも少年の肩の上で、しかも痛い腰を押さえつけられているからできない。

せめて早く降ろしてもらうことを祈るばかりだ。

・・・でも。

チラリと前方に目をやる。

光るものの大きさはさっきと変わってないように思える。少年が本当に歩いてるのか疑わしくなるくらいに、近づいている気がしない。

「ねえ・・・いつまで私は肩の上なのさ？」

「着くまで」

腰が居たくて早く地面に降りたい私に少年はさらりと酷いことを言つて精神的に地獄に落とした後、黙々と歩き続けた。

そのまま、まっすぐに光る場所へ行ってくれるのならあと数分は我慢できたと思う。もちろん、数分で着くとは到底思えないし、数分後も少年の有無を言わせない気迫に負けて肩に担がれてる姿は想像できるわけだが。

「ちょっと、どこ行く気なのよ？」



少年は早足で黙々と歩いてくれた。・・・別の方向に。  
少し低い声でそう問うと、少年はため息混じりにチラッとこっちを  
向いていった。

「お前。本当に馬鹿か？俺は行く場所を最初に言っただろう？」

「馬鹿はアンタだ！道思いつきり外れてるじゃん！」

私が喚くと、少年は心底呆れたようにまたため息をついた。

「お前は本当に馬鹿になったんだな。目の前に目的地があるからと  
いつてまっすぐ行けば着くというのか？お前は途中で道が切れたり  
してるとか考えないのか？まっすぐ行つて着くとお前は分かるのか  
？ここに來たのも初めてのくせして？」

一気にまくし立てられ、私は何も言えなかった。

いや・・・、何かを言おうとしても、少年の言うことは確かに正しい  
ので何も言い返せなかった、といったほうが正しいのかもしれない。

言い返せない悔しさでジタバタすると、腰を押さえつけてる手に力  
が入った。

暴れるな、鬱陶しい。

無言でそう言っているのが分かる。

普通なら怖気づいて大人しくしてしまうところ。だけど、私はそう  
じゃない。

確かに気迫は確かに怖いけど、私を必要としているらしいコイツが  
私に何かをするはずがないよね。

そう考えながら私は少年になんとか言い返せる言葉、困らせる言葉  
を探した。しかし、そう簡単に見つかるわけも無い。

「とにかく、この世界は俺のほう知っている。お前は黙って俺についてきてれば良かったんだ」

私が考えている最中、少年はポツリとつぶやくように言った。

その言葉を聞いたときは、あーだこーだと考え事をしていたせいで少年のつぶやきはあまり聞いていなかった。しかし、少年の言葉になにか引かかる部分があったことにぼんやりと気づいた。

・・・今の、違和感みたいなのなんだろう？

引っかかった部分がどうしても気になって考えてみるが、どうしても分からない。こんなことだったら無駄なことは考えずに耳を澄ませていれば良かったのにと、ちょっと後悔するが、今さっきまで時間が戻れたとしてもきつとうだうだと考えてしまったに違いない。私はそういう人だから。

私は少年に今なんていったのか聞こうとも思ったが、また馬鹿にされる気がして聞くのをやめた。

また私たちの間に会話は無くなり、静寂が辺りを包みこむ。その静寂を小さく壊すのは時折吹く風と少年の足音だけ。本当に寂しいところだと再確認してしまう。

どうして、こんなに寂しいところになっちゃたのかな。

ここの世界に長く居れば居るほど、胸の中に疑問がたまっていく気がした。

現に、私の胸の中には疑問がたくさん渦巻いていた。

## 第十話

疑問といっても、くだらないものばかりなのだけど。

「ねー・・・本当にいつになったら着くのさー。方向間違ってたらしいよねー?」

何か会話をしようと、悪態をつくようにして少年に言った。

「もうじき着く。間違ってたない」

少年はすまし顔でそう答えた。

・・・会話が続かない。

話していてこれほど会話が続かない人はこの少年が初めてだった。

・・・コイツ、会話続けようとしてないな。

私がイライラとしてきたところで、少年が呟いた。

「今からこの先に行く。いいな?」

んー?と、唸りながら、私は少年の指差す場所を見た。

「・・・」

私は何もいえなかった。

私たちの目の前に、急な坂道があるわけじゃない。大海原があるわ



は？何それ、どういう・・・

私が聞こうとしたとき、質問も待たずに少年は私を担いだまま崖に身を投げた。

私は落下していく怖さと、先ほどのコルの言葉に従いギュツと目をつぶった。

それでも、落ちる時の勢いは感じてしまう。

果てしなく落ちていきながら、投身自殺はこれほど怖いものなんだな、これから先自殺するようなことがあれば投身自殺だけはやめておこう。などと、くだらないことを考えていた。

しばらく落ち続け、そろそろ地面が近づくころだと思った私は怖がりながらも叫んだ。

「死んだらアンタの元に化けて出てやる~~~~~!!!!!!」

その声は虚しく辺りに響いた。

そして、私の体は地面に叩きつけられ地面には真っ赤な花が綺麗に開花・・・しない。気づけば落ちていく感覚も消えている。浮いている感じはするが。

目をつぶっているため、どうなっているのかわからないが・・・。  
先ほどまで吹いていた寂しげな風が肌に当たらなくなった。風の当たらないところに来たというより、私自身が別の空間に移動したような。

そう。ここへ来たときの感覚とにている。

丁度その時、またあのポイツと投げ捨てられるような感覚が私を襲った。しかし、すぐにまたふわつとした浮遊感に変わった。

「もういいぞ」

少年が呟いたかと思うと私の目を覆っていた少年の手が離れた。私はつぶっていた目をそつと開けた。力を入れてつぶっていたせいか、視界が少しぼやけていたがすぐに直った。目を開けて、足元に広がっている光景に私は驚き、息を呑んだ。

## 第十一話

「ここ、どこ？ 私たち浮いてるの？」

私の足元には青白く光る城のようなものがあつた。地面や空は相変わらず寂しかったが、その城からは寂しさなど微塵も感じず、どこか人をひきつけるような魅力があつた。

「ここは俺たちが住む城だ。今は上空から見てる。お前の言つとおりに浮いてるということだな」

その返事を聞いた後、私は少年の服にしがみついた。少年はクツクツと笑つた。

「お前、降りたいんじゃないのかよ？」

「だって！ 降りたら落ちるじゃん！！」

半泣きになりながらもそういうと、少年はまたクツクツと笑つた。

「大丈夫だ。俺が浮いてる間はお前も落ちない」

「なんだ……。じゃあ降りる」

私は少年の服から手を離し、腰に回っている手を解きにかかった。

「降りてもいいのか？」

なにを当たり前のことを質問しているのか。私はさっきから降りたといつてゐるのに！

「降りる！」

私がそういうと、少年は何の前触れもなく手を離れた。

瞬間、私は落ちるような感覚に襲われはしたが、少年の言うとおり地面に落下なんてことはなかった。

びくびくしながら立つと立った場所が結構安定していることに気づいた。浮いているというよりも透明なガラスが宙に浮かんでいてその上にいるようだった。チラリと自分の足元から下を見ると、地面からの高さに少しだけクラツとした。そんな私を少年はサツと支えてくれた。

一応礼を言つと、少年は笑った。  
その顔はとても優しくかった。

コイツ、私にあんな態度とるけど本当は優しくていいやつなんだろうなあ。

私が一人でそう思っていると、少年は伸びをしながら私に言った。

「そろそろ降りるか」

「うんっ」

ちよつとだけ元気になっていた私は少年に向かって笑顔で返事をした。

・・・その時、見てしまった。少年がニヤリと黒い顔で笑っているところを。

「・・・あの？」



笑っていた顔を引きつらせながら少年を見ると、少年は何も言わずに右手を胸の前に持ってきて指をぱちんと鳴らした。

途端に足元にあったガラスの上にいるような感触が消えた。

私と少年は重力に逆らうことなく落ちた。  
落ちている間に重たい頭が下になり、地面が近づいていることが良く分かった。

「・・・・・・・・っ」

地面がすぐ目の前に迫り、私はもうダメだと諦めギョツと目をつぶった。すると、予想していた痛みはなく、体が何かに包まれているような温かさがあった。

頑なに閉じた目をそっと開けると、地面との距離は5cmに満たないだらう辺りだった。

とりあえず、死んではいない・・・？

ホツとしたところで、いきなり包み込んだ温かさが消え、私は5cmに満たない高さから地面におちた。

いくら5cm以下だといっても、不意打ちでしかも顔面をぶつけたのだから痛い。

「ううう・・・」

ぶつけた鼻をなでながら体を上げると、何よりも先にお腹を抱えて必死に笑いかみ殺している少年の姿が目映った。

「ちょ・・・・・・・・、何笑ってんのさ！／＼／」

恥ずかしさで顔を真っ赤にしながらもけんか腰に言うと、少年はそ

んなの気にする様子も無くまだお腹を抱えていた。

「お、お前って本当に運動神経無いんだな」

ああ、運動神経無い私を見るのがそんなに楽しいのですか。そうですか。へえ……。そもそも私がこんな目にあってるのって、全部・

「お前のせいだろうがああ!!!」

私の叫び声と、少年のかみ殺した笑いが辺りに軽く響く。

……。もう、やだ。無理やりつれてこられたのにこんなに笑い飛ばされるなんて。

そう胸の中で考えて、はたと気づく。

少年が笑ってるのだ。さっきも、今も。かみ殺しているとはいえ声を出して。

これって、結構貴重？

あんなに怖い冷たい顔をして、無有を言わずここへつれて来たやつが子供のように笑うなんて信じられなかった。

笑われている恥ずかしさにより少し胸がムカムカとしたが、少年の無邪気な笑い顔を見ていると口でうまく説明できないが、ほわあつと胸が温かくなるのを感じた。

何故だかは分からないけど、私が知らない少年の顔を見れたことがとてもとても嬉しく思えた。

## 第十二話

地面に無事着地？した後、笑う少年を小突きながら私は目の前のお城に見とれていた。テレビとか写真とかでヨーロッパとかのお城を見たことはあった。お城なんてどれもあんなものだと思っていた。しかし、目の前にあるお城は今まで見たお城よりもシンプルな美しさで輝いていた。

多様の色を使い、煌びやかに装飾されたお城ではなく、無駄な飾り、色をすべて取り除き建てられたそのお城は内面から輝いているようだった。

「すごい・・・綺麗なお城だね」

「ああ」

少年は子供のように笑った。

「君って子供みたいに笑うんだね」

さも意外そうな顔でそういうと、逆に少年に小突かれてしまった。

・・・ん？

そこで、本当に今更ながら気づいた。

私はまだ、少年の名前を知らなかったのだ。

「ねね、君の名前って何なの？」

「は？」

「名前だよ。な・ま・え。私に優空って名前があるように君にもあるでしょ？」

「今更だろ」

「確かにそうだけど！」

教えてくれる様子を見せない少年に、不満げに頬を膨らませた。しばらくそうしていると、少年は折れたのかはあつとため息をついた。

「・・・コルだ」

「コル・・・ねえ。なんか、ちょっと可愛い名前だね」

私は本当に悪気は無く、ただ思った感想を素直に口にした。すると、殺気のような冷たい視線が少年・・・コルから向けられていることに気づく。

どうやら、コルは自分の名前を気に入っていないらしい。

・・・せっかく可愛い名前なのに。本人がこんな人じゃなあ。

「俺は男だ！可愛い名前なんか付けられたくねえし。俺はもともとこんな性格なんだよ！！」

「なんで私の思ってることが分かるのさ！！」

ビシッと突っ込みながらコルの様子を見る。怒った様な口調ではあったが、顔はほんのり赤く染まっているし、むきになるところが最初会ったときには想像できないほど子供らしくて全然怖くない。

そんなコルを見て、私は声を上げて笑った。

ここへ来たときは、不安と恐怖とその他いろんな感情でいっぱい何かを楽しむなんて出来なかったし、コルがいなかったらこんな楽しく笑えなかったと思う。いや、本当にいなかったらここへくることも無かったのだけど。

おなかを軽く抱えて笑いながら家にいたときからおしろまえこの場所に来るまでのことを考えていると、ここに来てからコルがいきなり優しくなったというか、硬いイメージが崩れたというか。やわらかくなつた気がした。

それはたぶん。本当に、コルの故郷に帰ってきたからだと思う。自分の知っているとこで、心の中で安心してるんじゃないだろうか。わかんないけど。

今回、コルは私の思っていることに気づかなかったのか、今も無言で冷たい視線を私に送っていた。

### 第十三話

まだ怒っている様子のコルに引つ張られながら、私はお城の中に入った。

お城の中も外見と同じくシンプルで無駄を一切取り除いたようだった。

お城というものはもっと絢爛豪華でキラキラしているものだばかり思っていたから、私は面食らってしまった。

「なんにも無いんだね」

「言い方が失礼だな」

コルはさっきから私に目をあわせようとしない。

かわいいといったことを根に持つてるのだろうか？心の狭い男だ。

「着いたぞ」

ふいにコルが静かな口調で言った。

そこは、どこかの部屋の前だった。重そうな扉が目の前にあり、何か厳密な雰囲気漂ってくる。

「フイーリア様。ただいま戻りました」

コルがその扉に向かって声をかけると、一瞬の間を置いて返事が返ってきた。

「入ってきてください」

その声を聞いたとき、私は自分の耳を疑ってしまった。

聞き覚えのある声だったからだ。

私がどこで聞いたのかを必死に思い出そうとしている様子を気に止めることなく目の前の扉に触れ何か呪文のようなものをボソボソとつぶやいた。

すると、重そうなその扉は軋みながらゆっくりと開いた。

完全に扉が開くのを見届けた後で、コルはツカツカと部屋の中へ入った。あわてて私もそれに従う。

私が部屋に入ると、それを待っていたかのように扉はひとりでに閉まった。

そこで改めて部屋の中を見回した。

大きなホールのようなその部屋には中央によく分からない魔方陣が描かれており、それを囲むようにして等身大より2回りくらい大きな柱が8つ立てられている。その柱の上には不透明な大きい黒い玉のようなものが乗っかっていた。

そしてその魔方陣の中心部に、一人の女性が立っていた。コルの言っていたフィーリアという人だろう。

私たちに背を向けるようにして立っているため、顔は見れない。

「フィーリア様、レーギス様と思われる人物をお連れしました」

コルがそういうと、フィーリアはゆっくりと私たちのほうを見た。

「　　」

フィーリアの顔を見たとき、私は正直心臓が止まるかと思った。目の前にいるフィーリアの顔は私の顔と同じだったからだ。

私が啞然としてフィーリアの方をみていると彼女はニヤリと笑い、私と同じ顔で、私と同じ声で静かに言った。

「お帰りなさい。わたしのカラダ」

その言葉を聞いたとき、私は言いようのない恐怖に襲われた。体はカタカタを小刻みに震えだし、この場から逃げたいと思っても、足がすくんで動くことさえまならなかった。

そんな私を見て、彼女はニヤニヤと笑いながら一步一步こちらに向かって歩き出してきた。

「いやあああああつ」

私はやっとの思いでのどの奥から声を出し、頭を抱えてその場にしがみこんだ。

「おい、どうした!？」

すぐにコルが私の隣にしゃがみ、声をかけてくれた。私はコルの着ている服のすそをつかみ、じっとしていた。

「大丈夫ですか？」

頭の上から、声をかけられた。私と同じ声でもなく、コルの声でもない。

ゆっくりと顔を上げると、そこには心配そうな顔で私を見る女性の姿があった。腰まである金髪の髪をたらしめているその女性は、さつき見た私と同じ顔の人が着ていた洋服に身を包んではいたが、顔は私とは違っていた。部屋を見回しても、私とコルと目の前の女性しかいない。

すなわち、今日の前にいるこの人がコルの言っていたフィーリアということだ。



・・・さっきのは幻覚？

いろいろなことが一気にありすぎて、自分で思っているよりも疲れてしまっているのだろうか。

「あ・・・大丈夫、です」

そう告げると、コルもフィーリアもほっとしたような表情になった。

「それでは、本題に入らせてもらいます。レーギス・・・いえ、優空さん。私たちにあなたの力を貸していただきたいのです」

フィーリアの言っていることはあまり意味が分からなかった。私の力といわれても、私は運動神経は無いに等しいし、一般人なのだから不思議な力などあるはずもないし。

ただ、この人たちの言うことを聞かないと元の世界には帰れないということと、これから今以上に疲れるだろうことはわかった。

「分かりました」

今の私にはこの返事以外は出来ない。

それに、ここまでできてしまった以上は私に出来ることならば協力してあげたいと思った。

## 第十四話

私の返事を聞くと、フィーリアは薄く微笑み胸の前で指をパチンツと鳴らした。

すると、その場には3つの椅子が出てきた。

「話は長くなります。どうぞ座ってください」

「あ、はい」

私はその椅子に恐る恐る座った。

実は椅子は幻覚で、座ろうとしたら尻餅をつくことになるのではないかと内心不安だったのだが割りと普通の椅子ですんなり腰を下ろすことが出来た。

「では、今からこの世界のことを簡単にお話します。少し長くなるかもしれませんが、よく聞いてください」

真剣なフィーリアの声に、私は静かに頷いた。

「ここ、クリスタツルスはたくさんの妖精とここに住む住人が共同して暮らす世界です。住人は妖精がいるからこそ成り立ち、妖精は精霊がいるからこそ成り立ちます。そして、自然を司る8体の精霊はこの世界を統治する者の存在によって成り立ちます。統治するものとは、精霊と同じような自然の力を使える者のことです。つまり、私や貴女のこと。統治者が二人というのはこの世界で異例のことです」

「す、ストップ！」

サラサラと流れるように話を進めようとするフィーリアの言葉を遮った。

フィーリアは小首を傾げて私を見つめた。

「説明が分かりにくかったですか？」

「違うよっ」

私は顔の前でぶんぶんと片手を振りながらそれを否定した。

「とりあえず、立場が弱い順に住人、妖精、精霊、統治者ってのは分かったけど・・・」

「いえ、立場が弱いものではありません。力が弱く、その他の強い者の力に影響されやすいのです」

フィーリアは私が勝手に解釈したことをさりと否定した。

ますますよく分からなかったが、それはこの際どうでもよかった。

私が話を止めた理由はこの世界に暮らす人や妖精なんかの立場が聞きたかったからではない。フィーリアの言った話の内容をひとつ否定したかったからだ。

「私、その・・・自然の力？とか、使えないよ？」

私がそういうと、フィーリアはそんなことかというように小さく笑った。

「貴女が使えないものの無理ないです。私も今は完全に操れてはいないのですから。精霊たちは今は眠っている状態です。それを起こさない限りは貴女は力を使えません」

少しだけ胡散臭いうさんくさとは思ったが、私が口を挟めばそれだけ話がやや

こしくなる事はわかった。

私は簡単にフィーリアの言ったことに相槌を打つと、話を促した。

「話を戻しましょう。統治者がこの世界に二人になることは異例のことです。普通統治者は一人でなければいけません。それは統治者の力がほかのものと比べて強大になってしまいうからです。しかし、私たちは100年の間この世界を壊さず統治することが出来ていました」

「100年・・・も？」

私の年は16だし、目の前のフィーリアも私より少し上くらいにしか見えない。

「ここの世界は貴女といった世界と時間の進みが違うのです。ここでの100年は貴女の世界の数年と等しいです。私の見た目が貴女とさほど変わらないのは肉体が朽ちていく時間がほかの世界に比べゆっくりとしているからです」

私が思っていた疑問を見透かしているようにフィーリアは言った。その後、少し深刻な顔になって話を続けた。

「長い間統治できていたことで、油断してしまったのかもしれない。それから少したってから異変が起こり始めました。住人や妖精が少しずつ消えていったのです。精霊たちにも異変が現れました。これではこの世界は壊れてしまうと行って、貴女は私やコルがとめるのも聞かずに一人で偵察に行きました。しかし、それから何時間たってもあなたは帰ってきませんでした。私の力で、貴女の間所を探しましたが結局は見つかりませんでした。私は諦めて一人でこの世界を統治していきました。しかし、それは無理に等しいことです。私たちは二人で生まれました。二人でいないとこの世界を統治する

ための力が上手く出せないのです。そのせいでこの世界は精霊も眠りにつき、妖精も住人も皆消えてしまいました。その矢先、コルが地球と言う世界に貴女を見つけたのです」

私はチラリとコルを見た。

コルは聞いているのか聞いていないのか目を閉じたままじっとしていた。

「後は想像できるでしょう。私はコルに言っただけを連れてきてもらいました。私の妹、レーギスの生まれ変わりである貴女を」

私はなんていって良いのか分からず、黙ってしまった。

川の水が流れるような速さで話が進んでしまったことも黙ってしまった原因となったが、聞きたいことが山ほどありすぎて何を言えば良いのか分からなかった。

「私は、何をすれば良いの？」

やっとその質問を言うと、フィーリアはにこりと笑って答えた。

「眠ってしまった8体精霊を起こして欲しいのです」

「それだけでいいんですか？」

いったいどんな試練が待ち構えているのかと気構えていた私は一気に脱力してしまった。もっと危険なことだと思っていたのに、ただお寝坊な精霊を起こすだけなんて。

それなら力なんてたぶん必要としないし、すっごく簡単なことじゃない。

しかし、ふと思う。精霊を起こしてフィーリアが力を完璧に使えるようになっても、同じく力を使えるようになった私が元の世界に帰ってしまったのは結局また同じことの繰り返しなんじゃないだろうか？

統治者の力が弱まり・・・また崩壊する？

「大丈夫さ」

考え込む私の横で、何故か眉根に皺を寄せた、多少イラついたようなコルがぼそりと呟いた。コルはコルで、何か考え事でもしていたのだろうか。

「え？」

「精霊が目覚めて力が戻ったら、俺がお前の力をフィーリア様に移す。そうすればお前がいなくても問題はない」

なんで、ここの人たちは私の考えがわかるのさ。

そんなにわかりやすい顔してるかな？

ちよつと目を逸らしがちに苦笑いしながら、コルの言った『いなくても問題ない』という言葉が心の中で反響して寂しい音を奏でていた。

## 第十五話

言いたいことは全部言い終わったのか、フィーリア何か質問はありますか？ときいてきた。

質問したいことはたくさんある。

だが、いざ質問してと言われると何を質問したらいいのかわからない。

質問っていわれてもなあ……。

んー……と、考えているとふとあれ？と思うことがあった。

住人はすべて消えたって言ってたし、統治者は私とフィーリアだけじゃあ……コルは何で消えないの？

「あの、コルって、何者？」

率直に聞く。

一番最初に浮かんだ疑問だし、こんなの自分で考えててもわかるわけないしね。

「コルは神官です。私の力が及ばなく、壊れそうになったこの世界は歪が多いのです。それを塞いだり、その歪を移動に使ったり出来る人です」

だから私の世界に来れたり、ワープしたりも出来たんだ。

コルって意外とすごいんだなあ。

私が感心していると、フィーリアは突然思い出したように声を上げ

た。

「コルツ、ルブルムは食べさせましたか？」

慌てたようなフィーリアを落ち着かせるようにコルはゆっくりと笑って言った。

「ご安心ください。フィーリア様。事前に食べさせてあります」

二人の間に流れる話の内容が私にはよく理解できない。

ルブルム・・・??

ここには私たち3人しかいないし・・・私がそれを食べたって言うてるの??

はつきりいって記憶にない。私はここまでほぼ強制されてつれてこられたわけだし、コルから何か食べさせられたわけじゃない。

「あの、ルブルムって・・・なに？」

私が遠慮がちにそう聞くと、一瞬落ち着きを取り戻していたフィーリアはコルを驚いたような焦ったような目で見つめた。

やっぱり食べさせてなかったのですか!?

その目は確実にそういているのは、私でも感じられるのだから誰でも分かるだろう。

はぁ・・・、とため息をついたコルが私を見て言った。

「お前は昼ごろに赤い実を食っただろう？」



「はあ？私そんなもの食べてないし。赤い実なんて」

食べてなんかない。そう言おうとした私は心に何か引っかかりを感じた。

赤い実・・・赤い実・・・？

私の頭の中に、あの時の地獄が蘇る。

お母さんが用意した私の食事。

あの灰色の液体の中には、たしか赤い果肉のようなものが浮かんでいた。

しかし、赤いものが浮いていたからといってそれがフィーリアのいうルブルムだとかいうものだとは限らない。お母さんのことだし、イチゴやらトマトやらなんかを適当にぶち込んだのだろうから。それに、いくらお母さんでも見覚えのないようなものを娘の食事に入れるなんてことはしないはず。・・・しないと思いたい。そもそも冷蔵庫にどうやって入れたのかさえ説明が・・・。いや、コルなら可能なのだろうか？

グダグダと考え込んでいる私に、コルは呆れたような言い方でいった。

「昼に食事をしただろう？あの中に入ってたんだ」  
「・・・・・・・・・・」

やっぱりあの液体の中ですか・・・。

得体の知れないようなものを平気で食事に混ぜるお母さんの私への愛情を疑いつつ、私はため息をついた。

「でもー。私食べてないよ？全部はいちやっただもん」

「別に飲み込まなくちゃいけないわけじゃない。ルブルムの周りの液体が口内に入ればいい話だ」

「なんで私の朝食に混ぜるのさ。今ここで食べてもいいじゃん」

「ルブルムの液体は異様な味がするんだ。まずいものはまずいものに入れたほうがいいだろう？」

「・・・」

なんか、納得がいくようないかないような・・・。

いや、いけないよね？

いつちゃだめだよね？

「で？ルブルムとやらを食べなかったらどうなるの？」

私が無気なく聞いたその質問に答えたのはフィーリアだった。

「貴女の世界と私たちの世界ではいろいろな部分で異なりがあるのです。空気中の物質もそのひとつ。ルブルムの液体には少量ですが魔力があります。そういった液体を体に取り入れなければ呼吸器官が麻痺して死」

「分かったからっ」

ルブルムを食べなかったらどんな結末になったのかは分かった。確かに、ああいう風にでも食べさせられてなかったら私は今危険な状態だったかもしれない。こんなところにつれてこられて、変な実を食べさせられそうになったら絶対に拒絶していただろうから。そう思うと確かに怖い。だが、そんなことを一般人にさりとってしまいうフィーリアの方が私にはある意味怖いと感じてしまった。

## 第十六話

+++

「さて、いきなりこんな所につれてこられて貴女も疲れたでしょう。今はゆっくりと体を休めてください。この城には正常に使える部屋が私の寝室を抜いて1つしかないんです。後々準備させますから、今はその部屋を使ってください」

フィーリアのこの気遣いにはありがたかった。とりあえず、今私は疲れているんだ。本当にいろんな意味で。

「ありがとうございます」

私はペコリとフィーリアに頭を下げた。

ゆっくりと頭を上げた先にあったのは、コルが少し不満そうな顔でフィーリアと言葉を交わしている光景だった。

「・・・分かりました」

何を話していたのかは分からないが、コルが深くため息をつきながら諦めの表情を見せているのだからそれほど嫌な話だったのだろう。

まあ、私には関係ない・・・と思うけど。

不機嫌そうなコルはそれでもきびきびとした足取りで私の隣まで来た。

「これからお前を部屋に案内するからついてこい」

そういうと、しまった扉の前でコルがまた何かを言った。  
入ったときと同じように重々しいその扉は軋みながらゆっくりと開いた。

「行くぞ」

ほえゝゝゝと、改めて扉を見ていた私にコルは突き刺すように冷たく言った。

フィーリアとの話でイライラとしているからってそのイライラをこっちに向けないで欲しい。

そんなことを口に出せばか弱い私に何があるか分からないので今は言わないでおく。

無言で歩いていくコルの背中を見つめながらついていくと、コルが突然に立ち止まった。

「うゝ」

ただコルの後についていた私が、それに習ってすぐ立ち止まることなど出来るはずもない。私はコルの背中に思いつきり鼻をぶつけてしまった。

「うううゝゝ止まるなら止まるって言ってよお」

じんじんと痛む鼻を押さえながら、コルを睨む。

「言って反応できるのか？」

「うゝゝゝ」

返す言葉もございません。

「で、なんで止まったの」

「着いたから」

不満げな私の質問をさらりと答えると、コルは目の前の質素な扉を指差した。

先ほどまでフィーリアや私たちがいた部屋の扉とは天と地ほどの差・・・というといいすぎかもしれないが、かなりの差があった。この城の色と同じで白い色をしている扉だが、重々しい感じなどなくごくごく一般家庭にあるような質素な扉だった。

ひとつ違ふことがあるとすれば、その扉についている模様だろうか。扉の中央と、四隅に小さな丸い模様が描かれていた。

どこかで見た模様・・・。

どこで見たかを思い出そうとまじまじとその模様に見入っていると、頭の上から声が聞こえた。

「開けるからどけ」

えらそうな声を聞いて、私はムツとしながらも扉の前からどいた。

コルは扉に近づくと、コンコンと魔法陣のひとつを叩いた。

「・・・え。それで開いたの？」

「ああ」

さっきの重そうな扉を開けたように何か呪文でも言うのかと思って、いた私は拍子抜けしてしまった。

そんな視線に気づいたのか、コルは私を見て言った。

「あの扉は特別なんだ。あの部屋を守るために特殊な結界がはってあるんだから。こういう部屋はこの魔方陣が結界をつくって守ってくれる」

ガチャ  
・  
・  
・

私に説明し終わったコルは扉を開けて中へと入っていった。私もそれに続いて中へと足を踏み入れる。

部屋の中は綺麗に片付いていた。

埃を被っているところはどこにもないし、ベッドやソファ。本棚やランプ。一般家庭にあるようなものがその部屋にはあった。

unnecessaryなものが何もないさつきまでの廊下とは違い、ここは誰かが使っている気配が感じられる部屋だった。

「なんか、ここって誰かが使ってるみたいな部屋だね」

自分が言っ  
て、はた  
と思う。

ここに住んでいるのはフィーリアとコル。

フィーリアの寝室と、もうひとつしか使える部屋はないといっていた。しかし、フィーリアとコルが一緒に部屋で寝泊りをしているとは思えない。

それに、部屋を出る前のフィーリアとコルの間で交わされた会話。

コルの諦めたような顔……。

私はコルの顔をそつと見た。

バチリと目が合い、視線が絡み合う。

「……もしかして？」

「そうだよ。ここは俺が使ってる部屋だ」

ため息混じりにコルが言った。

ため息つきたいのはこっちの方だよ！と言ってやりたいが、コルだってこんなことになるのは嫌だったに違いない。

私と相部屋になるのがそんなに嫌なのかと思うと、なにか訳分らないもやもやが胸をいっぱいにするが気づかないふりをした。

## 第十七話

+++

コルは私に部屋の内部の説明を始めた。

ここは触っちゃいけないとか、何々に必要なものはそこに置いてあるとかそんな説明だった。

もちろん馬の耳に念仏で、私の頭の中にコルの説明は入ってくるはずもない。私の頭の中は、この部屋でコルと一緒に過ごさなきゃいけないという試練をどう乗り越えるかということではいっぱいだったのだ。

「簡単な説明は以上で終わり。俺はフィーリア様に呼ばれているから行く。勝手な行動は慎めよ」

言いたいことを言うと、すぐにコルは扉の向こうへと姿を消した。独りになった部屋は、無駄に広いせいかどこか寂しく感じられた。私は立っているのもなんだと思い、部屋の中央に位置されている白いベッドに身をうずめた。

「はぁぁ・・・」

ふかふかなベッドに寝転がっても疲れはとれそうになかった。それどころか、口から漏れるのは重苦しいため息ばかりだった。

しかし、これからのことを考えると私にはため息しか出てこない。この世界が大変なのは分かってるし、それを助けたいと思ってしまったのは私だし、それは納得していることだし気持ちだって変わっ



ていない。

だが、まさか体を休めるという部分でこんな試練が立ちはだかっているとは思っていなかった。

「まったく。フィーリアは何考えてるのかなあ。コルは男なんだよー……」

一人部屋にしては十分な広さがあるこの部屋でも、相部屋の相手が男で、しかもコルだと思うと妙に意識してしまう。

年頃の女の子なのだからそれは仕方の無いことだ。うん。

「コルだって今まで一人で使ってきた部屋なんだから、私と一緒にだと窮屈なんだろうなー」

そう何気なく呟いて、気づく。

この部屋は今開放されたわけではなく、以前からコルが使っていたのだ。

目を閉じると、コルの気が部屋を満たしているように感じる。

……このベッドでコルは寝てるんだよね。

ふと、そんなことが頭を掠める。それと同時に私は勢いよく上半身を起こし、自分が寝転がっていた場所に目を落とした。

ピシッと敷かれていたシーツは、私が寝転がったことにより無残にもシワだらけになってしまっている。

私は自分がつけたシーツのシワを左手でそつとなで、視線をベッドの隅々まで這わせた。

「……コルが……寝てたベッド」

口に出してそう呟くと、なぜだか顔がカーッと熱くなっていくのが分かった。

何考えてるのっ私っっ！

ブンブンと頭を振って、頭の隅に沸いてきた妄想を飛ばす。

頭がぐらぐらと吐き気がするほど振っていると、ようやく沸いてきた妄想が飛ばされた。

しかし、そういう考えを持ってしまった原因はこの部屋にあるのだ。この部屋にいる限り私のそれた妄想が完全に拭われることはないのかもしれない。

「……ちょっと出よ」

小さくため息をつき、火照った頬を気にしながら、私はそっと部屋から抜け出した。

廊下に出ると、冷たい空気が私の体を包み込んだ。

「さて……。外に出るにはどういう道順で行けばいいんだっけ……」

とにかく歩こう。

私は質素な純白の美しさを放つ廊下を歩き出した。

一歩一歩足を動かすたびにカツカツという無機質な音があたりに響く。そんな寂しい音にまびれるようにして、人の声が聞こえた。

「  
」

この声は・・・コルと・・・フィーリア？

私の足は誘われるようにしてその声ができる方へと歩を進めた。

『 ですが・・・』

『 ね』

二人の声が少しずつ大きくなってくる。

見ると、前方にはコルの部屋と同じような扉があった。その扉はかすかに開いていて、中からほんのりと優しい明かりが漏れている。

どうやらあの部屋に二人はいるらしい。

私は息を殺して、そっと扉に近づいた。

「フィーリア様はあの者が本当にレーギス様だと思われるんですね？」

あの者。

どうやら私のことを話しているらしい。

「ええ。あの方で間違いはないはずです」

「あんな何も知らないような娘に何が出来るといいますか？」

焦りや不安を押し殺したようなコルの声が聞こえて来た。

気づかれないように、と願いながら、私は扉の陰から部屋の中を覗いた。

真剣なコルの顔と、哀しげなフィーリアの顔がそこにあった。

「 心配は要りません。あの方こそがレーギスの生まれ変わりなのですから」

コルは何も言わず、フィーリアの方を見ていた。

私が覗き見していることにはまだ気づいていないらしい。

『あんな何も知らないような娘に何が出来るといっんですか？』

コルの言った言葉が頭の中でこだましている。

確かに、私は何も知らない。助けたいと思っても、出来るかなんてわからない。

少しでも力になりたいと思ったのは、迷惑だったのかな？

胸の中がぐしゃぐしゃとして、気持ち悪い。

まだ部屋の中ではコルたちが話しているが、そんなもの聞く気分になれなかった。

早くここから離れよう

「フィーリア様」

数歩部屋から離れた私の耳にコルの声が聞こえた。

先ほどまでの感情を押し殺したような声ではなかった。

小さないい争いに似た会話はいつの間にか幕が閉じたらしい。

良かったと思いながら少しずつ、部屋から離れた。

背中から、返事をする声が聞こえる。

「私用での二人きりです。フィーリアって呼んでくれないのですか？」

。

フィーリアのその言葉を聞いたとき、私は停止ボタンでも押されたかのようにその場で動けずにいた。

胸の中のぐちゃぐちゃした感覚が強くなり、理由もなく泣き出しそ

うになってしまった。

「ですが・・・」

「敬語もダメです。いつも通りに名前だけで呼んでください」

優しいフィーリアのその声が、突然卑しい者の声に聞こえた。  
私の知らない二人の日常。

それは容易に想像できてしまった。

「ねえ。呼んでくれないのですか？」

・・・・・・・・・・

声にならない心の叫びをあげる。

こんな最低な考えしか出来ない私が心底嫌になる。  
二人がそういう関係だとしても、私にはまったく関係のないことなのに。

まず、こうやって悩むこと自体が変なことなのに。

呼んで欲しくないと思う自分がここにいた。

私は思わず耳をふさいでその場にうずくまってしまった。フィーリアの声も、コルの声も聞きたくなかった。

しかし、いくら耳をふさいでも、コルの声は私の手をすり抜けて耳の中へと侵入する。

「・・・フィーリア」

右目から、ツーツと一粒の雫がこぼれた。

## 第十八話

+++

「はぁ・・・・・・・・」

私は今、一人でコルの部屋の中にいた。

二人の話を聞いた後、どうやってここまで戻ってきたのかまったく覚えていないが、コルやフィーリアに責められていない現状から判断して二人に見つからずに戻れたのだと・・・思う。

この部屋に戻ってきてから時間が経ったおかげか、いろんな感情でごちゃ混ぜになってしまっていた私の心も少しずつ落ち着きを取り戻していた。

ただ一つ心のもやになるものがあるとすればコルのことだ。随分時間が経ったのに、まだ戻ってきていない。

まだ二人で一緒にいるのかな。

そう考えると、落ち着きを取り戻していた心が、ざわざわと乱れはじめそうになる。

私は必死にそれを抑えて、大きく一度深呼吸をした。

別に私は、フィーリアは嫌いではない。むしろ、優しい口調や笑顔には好感は持てた。友達にいたらいいなっていうタイプで、もしも私が男ならば絶対に惚れていると思う。

そんな人を、あんな風に思ってしまう自分が信じられなかった。

だけど、私がそういう印象をフィーリアに持ってしまったのも紛れもない事実だった。

私・・・どうしてあんなこと思っちゃったのかな。

自分という人間が、ひどく汚れていると感じたのはこれが生まれて初めてのことだった。

「ああ・・・」

こういうふうに、心が落ち込んでいる時は誰かにそばにいて欲しいものだと思っただ。

だが、ここには気を許せる親友も、家族もない。

私は独りなのだ。

この心の落ち込みも、自己嫌悪も自分自身で解決しなくてはいい。

『孤独』

いつもは何でもないと思ってしまっこの二文字が今はやけに私に重くのしかかってくる。

人ってこんなにも浅はかで脆い生き物だったんだ。

少しシリラスじみたことを思ってみるが、どこか様にならない。

「・・・・・・・・ふう」

少しバカバカしいことを考えていたら、数段気持ちが悪くなった。人という生き物は単純で、どんな苦痛でも受ける側の心の持ちようで地獄にも天国にも変わってしまうのだと私は思う。

独りという孤独がまだ胸に巣食ってはいるが、この際それは気にしないことにする。

今はうじうじ悩んだり、悲劇のヒロイン的心情なんて想像していても仕方がない。

心のもやの一番の解決策を探した方が賢明なのだと優空は思った。

解決策は案外早くに見つかった。  
とても簡単なことだ。

「よし。忘れようっ」

考えるのが面倒だったからこんな策になったわけじゃない。  
本気で考えてこんな策しかでなかったのだ。

・・・まあ、面倒になったというものあるけど。  
手っ取り早く忘れるにはどうすればいいかなあ・・・。

策を考えるのは簡単だったのに、今度は策の実行の仕方について頭を悩ませることになってしまった。

++

「それにしても、本当のことを言わなくてよかったのですか？」

「それはどういう意味です？」

突然神妙な顔でそう聞くコルに、フィーリアは厳しい顔でたずねた。  
コルはフィーリアの放つ気迫に押されそうになったが、ぐっと我慢して前へと出た。



「あいつに・・・フィーリア様がレーギス様だといっている奴に言った説明です。精霊たちは眠りについたわけではないし、それはフィーリア様の力が足りなかったわけではないでしょう」

コルの言葉にフィーリアは耳を傾けるだけで何の反応も示さなかった。

すべて本当のことで、訂正など入れることは出来なかったせいかもしれない。

何も言わないフィーリアに、コルは少し強い口調で言った。

「こういう細かいものでも、説明を怠れば危険があるのは知っているはずでしょう！？まして今回は本当のことを言わなかった。分かっていますか？命の危険だって」

「黙りなさい」

コルの言葉は、フィーリアの言葉によって遮られてしまった。

いつにない厳しく鋭い声に、コルは次の言葉を発することが出来ずにいた。

一拍の間を置いて、フィーリアは言った。

「コル、部屋に戻って休みなさい。もう疲れたでしょう？」

いたわりの言葉の中には、早くこの部屋から出て欲しいという思いが込められているのがコルにも分かった。

「・・・」

何も言わずに、丁寧にお辞儀するとコルは静かにその部屋から出ていった。

コルがいなくなった部屋で、フィーリアはコルに言われた言葉を思

い返していた。

本当のことを言わなくてよかったのですか？

眠りについたわけではないし、それはフィーリア様の力が足りなかったわけではないでしょう。

分かっていますか？命の危険だつて

「・・・・・・・・分かっていますよ。そんなことくらい。コル、貴方よりもよく分かっています。貴方の知らないことも・・・・・・・・」

呟く言葉はフィーリア以外の誰の耳にも入らなかった。

## 第十九話

+++

「い、お」

遠くで聞き覚えのある声がした。

この声は誰だろう？ すごく・・・安心する。

「おいっ！」

ボーっとそんなことを思っていた私の耳元に、先ほどまでとは比べ物にならない大きな声がきこえた。

ガバリと、反射的に体を上げると視界の中にぼんやりと人の姿が浮かび上がる。

「誰・・・？」

「寝ぼけるのも大概にしろ」

コツン、と頭を小突かれた。

ぼんやりした視界でも分かる。この声はコルだ。

どうやら、実行方法を考えている間に眠ってしまったらしい。

「あ・・・おかえり」

私はいたって普通を装って声をかける。

大丈夫。声は震えていない。

少しずつ視界がはつきりしてくると、コルの納得のいかないような

顔にぶつかる。

「どうかしたの？」

「別に」

相変わらずそっけない態度だった。

フィーリアには優しいんだろうな。

余計なことを考えてしまったと少し後悔した。

・・・ダメだ。

私はそう思った。コルにこんな態度をとられると、なんだか胸が苦しくなってしまう。そして、ついフィーリアと比較してしまう。こんなにも自分は弱かったのだろうか。

「お前こそどうかしたのか」

ふいに声をかけられて、心臓が飛び上がる。

「・・・別に」

同じように返すと、コルは私の横に寝転がった。

「別にはないだろ」

「どうして」

ついつい言葉が鋭くなってしまう。

少しの間をおいてから、コルは体を起こし私の目を見ながら言った。

「元気がないから。ここに連れてきた時の威勢の良さはどこいった」

「・・・別に」

私は意識的にコルから目を離し、行き場の定まらない視線の先を中で泳がせた。

コルは小さくため息をついた後

「言いたくないならそれでいい」

小さく言った。

私は長く息を吐きながら、背中からベッドへと倒れこんだ。

・・・言えるわけじゃないじゃん。

そんな私に習って、コルも背中からベッドへと身を投じた。横を向くと、同じように横を向いていたところと目があう。

「・・・無理はするなよ」

今までにないような小さな声が聞こえてきた。

私のことを・・・心配してくれてる？

ただ、単純に嬉しかった。

「うん」

小さくそうつと、横にしていた首を元に戻した。すぐ近くに寝転がっているコルと目とあわせているのは、嬉しさ半分とても心臓に悪い。

「・・・あのさ」

天井をあえげたままの状態で、私は口を開いた。

「ふい・・・フイーリアって、優しいよね」

「・・・そうだな」

「やつぱり・・・優しい人って、誰からも好かれるのかな？」

あまりにも突拍子ないことを口走ってしまったから、慌ててまだ寝ぼけてるみたいと付け足した。

コルは付け足したことを聞いてんだか聞いてないんだか分からないが、少し笑いを含んだような声で言った。

「さあな。そういう感情は人それぞれだろ」

「・・・コルは？」

チラリと目だけをコルのほうへ向ける。コルは仰向けになり目を閉じていた。

「さあな」

さすがにそこまで話してはくれないか。

でも、幾分心が軽くなった気はする。

私はコルの返答に何も返さず、ただ黙っていた。室内には私が呼吸をする音とコルが呼吸をする音しか音はない。

私はコルと一緒に相部屋の運命を受け入れ始めていた。どうせ、新しい部屋が準備できるまでの短い期間なのだから、少しでもコルと一緒にいられるならそれは嬉しいことではないかと考える方向を変えたのだ。

「・・・・あれ？」

間抜けな声を出してしまった。

「何？」

静かに聞き返すコルに、何でもないと急いで言つとコルが寝ている方と逆の方向を向いた。

ずっと、気にかかっていた疑問だった。

フィーリアがコルと親しげに話していただけでなぜあんなにも心が乱れてしまったのか。

コルの一言一言に一喜一憂してしまうのか。

それってつまり・・・・。

私が、コルのことを好きってこと？

## 第二十話

優空は頭にわいてきた考えを拭い去った。

ないないないっ、ありえない！こないきなり訳分からんとこ連れてくるし酷いし冷たいやつを好きになるわけないし！

心の中で全力で否定するが、そんなことをするほど体は熱くなってしまう。

冷静になっていない証拠だ。

・・・コルはひどいやつだもん。私が好きになるはずないもん。でも・・・優しいところもあるんだよね。

先ほど私の体を心配してくれた気のことを思い出す。  
自分を上手く表現できないだけで、本当は良いやつなのかもしれない。

「あ、そうだ」

一人で考え事をしていると、横から声がした。

「何？」

「お前今から寝るだろ？もう遅いし」

「？うん」

コルは私の目を見ながら片手でポンポンッとベッドを叩く。

それは・・・一緒にベッドで寝ようというお誘いかー！？



好きだの何だの考えていた優空の頭は正確な判断ができていなかった。

カアアアツと顔が赤くなる優空を尻目に、コルは一言いった。

「これは俺のベッドだ」

「は？」

突拍子もない言葉に私は間の抜けた声を発する。

コルの部屋に通されてしまったのだから、ここにあるものがすべてコルのものだということぐらい分かる。

言っている意味が分からないという顔をしている私を見て、コルはため息をついた。そして、私の後方を指差す。

頭にはてなマークが浮かんでいるままこの指差す方を見ると、そこにはソファがあった。

・・・もしかして・・・？

「俺はここで寝る。お前はあそこで寝ろ」

「やっぱりっ」

思わず声に出してしまった。

「分かってたんなら早くソファに行け」

「そこはさあ、普通逆でしょ！私がベッド、コルがソファ！」

「何で俺の部屋で俺が我慢しなくちゃいけない」

「私は客も同然でしょ！」

「知らん」

言い争ってみるが、コルは聞く耳持たずといった感じだった。

その後も言い争ったが、結局は私が折れてソファにいくことになってしまった。

コルは本当は良い奴。

それが数分前の私の考え。

前言撤回。

コルはやっぱりひどい奴なんだっ

+++

「いつまで寝てるんだ」

んー・・・もう朝・・・？

「おい。起きろ」

もう少しだけ・・・zzzz

「おい！」

「もうっ、いくら平日だからってもう少し寝かせてくれたって良いでしょ！お母さんの意地悪ーっ！！」

そう叫びながら起き上がると、コルと目が合った。

「お母さん？」

明らかに不機嫌そうな声で私に問いかける。

「寝ぼけてました」

すぐに反省の意を見せると、コルは小さくため息をついて言った。

「ふん．．．もう朝だ。起きてしたくしろ。食堂にフィーリア様が待ってる」

フィーリアに様をつけているコル。やはり、二人でいるときのみのだろうか。

って、だめだめ。

考えない考えない。

「仕度つていつても．．誰かさんがいきなり連れてくるから何も持ってきてないです」

総悪態をつくどギロリと睨まれたが、私は正論を言っているんだから気にしない。

「そこに着替えがある。部屋出て待つてるから早く着替えろ」

ソファの横にある小さめのテーブルに確かに着替えがある。

手にとってみると、滑らかな布地で触れている手が気持ちよかった。

「分かった」

そういったのを確認すると、コルは部屋の外へと出た。

私は一人になった室内で服を脱ぎ、用意された服に着替える。

ワンピースタイプのその服を頭から被って着ると、優空のために用意されたかのようにぴったりだった。

最後に腰の辺りを茶色に染まっているベルトで止めて、準備完了。

「あ、そだ」

部屋の外で待つてるコルのところに行く前に壁にかけてある鏡で変なところはないか確かめた。  
ぱっと思では変なところなんてない。

「よしっ」

小さく気合を入れた。

部屋を出ると、すっかりコルは待ってくれていた。

しかし、私が出たのを確認するなり足早に歩き出す。

「ちょっと待ってよっ」

私は慌ててコルの後を追い、食堂へと向かった。

## 第二十一話

+++

食堂の扉もほかの扉と同じように、コルの言う魔方陣のようなものが書かれていた。  
さすがに徹底している。

扉を開けると、中にはフィーリアと……青髪の知らない男の人がテーブルの向こう側に立っていた。  
歳は私より2〜3歳ほど上だろう。

「コル、優空おはよう」

至福の笑みで挨拶をするフィーリア。

その笑みに嫌な感じは一切なく、ただ好感をもてる綺麗な笑顔だった。

フィーリアの横に立っている男の人は、私たちに気づくと深々とお辞儀して笑いかけてくれた。

その笑顔はとても温かくて、心が少しどきどきと早くなった。

あの人……誰なんだろう？フィーリアやコル以外にも人っていたんだ……。

その人を見つめながらそんなことを考えていると、頭に何かが当たった。

「……!？」

すぐさま何が当たったのかを確かめると、コルの手だった。コルは痛む頭をさすりながら睨みつける私に冷ややかに言った。

「ボーっとしてんじゃねえよ」

私の目の前にいたコルは、昨日の少し優しい感じのコルではなくここにつれてくる前の悪魔なコルだった。

何、朝から不機嫌なのかなあ。そんなにお母さんって呼んだの嫌だったのかなー。

プクーっとなりを膨らませたところで、フィーリアがクスクス笑いをしているのに気づいた。恥ずかしくなった私は、コルを睨むのをやめてフィーリアに視線を向けた。

視界の中にいるのはフィーリアと、隣の男の人。

「ねえ、コル。あの人って誰？」

コソコソとコルに聞く。

「気になるのかよ？」

「気になったから聞いているの」

私がそういうと、コルは短く

「知るか」

と呟くように言って、ぷいっとな横を向いてしまった。  
先ほどよりも確実に不機嫌になったことがよく分かる。

ああ・・・男子ってわかんないっ

少しイラだった所で、フィーリアが私たちに席につくように促した。朝からイライラしてるのもどうかと思い、私はおとなしくそれに従う。

コルも不機嫌なのは相変わらずだが、おとなしく席に着く。

私たちが席についたのを確認すると、フィーリアはそばに立っている男の人に目配せした。

男の人はフィーリアに優しく笑いお辞儀すると、用意していた食事をテーブルに並べ始めた。

果物の乗った台の高い銀の皿。

パセリで飾り付けされているスープ。

焼きたてのパン。

その他もろもろ。

今まで生きてきた中で目にしたこともない食事だった。

「すごい・・・」

思わず感嘆の声を漏らしてしまう。

「光栄です」

ふふっと、男の人は笑った。

優しい笑顔・・・誰かさんとは大違いだあ・・・。

「セル、準備ありがとう」

食事を並べ終わった男の人に、フィーリアが声をかけた。

セルと呼ばれた男の人は、はいと笑って返事を返した。

「それでは僕はこれで」

最初と同じように深々とお辞儀をすると、男の人の周りに風が吹いた。

男の人は風の中に消えるように見えなくなり、後に残った風はフィーリアの胸のあたりに吸い込まれていった。

「・・・・・・」

何・・・・今の・・・・。  
人が目の前で消えた・・・・!?

あまりのことに、フィーリアを直視したままでいるとフィーリアはクスクスと笑った。

「驚きました？」

「まあ・・・・だって、人が・・・・」

「ふふ」

楽しそうに笑うフィーリア。

どこか馬鹿にさている気がするの・・・・私の被害妄想かな？

「馬鹿になんてしてませんよ」

笑いながらフィーリアは言う。

本当に何で人の思ってることがわか・・・・



「顔に書いてありますから」

今すぐ鏡で自分の顔で確認したい。

「もう……。さっきの……。セル……。さん？つて、何者なんですか？」

フィーリアは一瞬だけ視線をコルに向け、再度私に戻した。

「セルは、今は私の……。よく言えば分身。悪く言えば使いのよう  
なものです。必要なときに呼び出して、用のないときは私の体へ戻  
ります」

「ふむ」

「そして」

フィーリアは続ける。

一瞬ためらうようにまたコルのほうを見る。

コルはフィーリアの目を真っ直ぐに見て、やれやれという感じで頷  
いた。

「コルの実の兄でもあります」

へえ……。コルのお兄さん……。

つて……

「ええええええええ！？」

## 第二十二話

私は信じられないという風にフィーリアとコルを交互に見た。

コルはわからないが、見る限りフィーリアは嘘をついているように思えない。

「で・・・でも・・・」

セルという人がコルの兄だとは私には思えなかった。

だって・・・コルとセルさんが兄弟なのなら・・・なんで・・・

考え込む優空を見て、フィーリアは優しく言った。

「優空。貴女の疑問に思っている点はわかります。コルと兄弟であるセルが、どうして私の分身となっているのか、でしょう？」

フィーリアの目はどこか悲しそうだった。

そんなフィーリアに申し訳なさそうに言う。

「あ・・・いや。コルとセルさんが兄弟ならなんで弟のコルは意地悪鬼畜かなと」

「・・・・・・・・」

啞然としているフィーリアの顔。予想が外れたことに驚いているらしい。

確かに、普通ならそこに注目知るのかもしれないが、生憎私にはそこに気づくほど頭の回転はしていなかった。

「あはは…」

フィーリアの表情に、なんと言って良いやらと笑ってごまかそうとすると、すぐ隣から視線を感じることに気づいた。もちろん隣にいるのは誰なのか分かる。

殺気立って睨んでいる理由もよく分かる。

・・・地雷踏んだかな。

私は少し僅かに反省し、決してコルのほうを見ないようにした。

「ふふ。仲が良いんですね」

「・・・どっちがですか？」

言っただけでしまったと思った。

私はなんてことを言ったのだろう。

慌てて上目遣いにフィーリアの顔色を伺う。フィーリアは何か閃いたような顔をして少しにやけながら私を見ていた。

「とりあえず、食事を食べましょうか。せつかくセルが用意したのに冷めてしまします」

フィーリアが食事を食べ始めたのを合図に、私も用意された食事を口に運んだ。

+++

食事を食べ終わると、どこからともなくセルが姿を現した。

何も言わずに食器の類を片付け始める。

「……フリーリア様。俺は先に部屋に戻ります」

コルが立ち上がり、食堂を出て行く。

「あ……」

私もコルの後を追おうと立ち上がった。

まだこの建物の道が分からないのだから、置いていかれたら絶対に部屋にたどり着けなくなってしまう。

しかし、追うことはできなかった。フリーリアに呼び止められたからだ。

「すみません。優空には、話しておきたいことがあるんです」

今から部屋を出れば、コルに追いつくことはできるかもしれない。だが、コルに追いつくこと以上に、フリーリアの話しておきたい事が気になった私はここに留まることを選んだ。

「話しておきたいことは二つあるのです」

「はい」

私は再度椅子に腰を下ろしてフリーリアと向き合った。

セルは食器を片付け終わったらしく、すでに姿を消していた。

「一つは。セルのこと」

予想していた通りだと私は思った。

フリーリアがさっき言っていた、こるとセルの違いのことだという

こともなんとなく予想ができる。

じゃあ、もう一つって？

「もう一つは、昨日の夜のことです」

。

昨日の夜という言葉に反応した優空の顔をフィーリアは見逃さなかった。

「やはり、聞いていたんですね？」

「……」

昨日の夜。

コルとフィーリアの親しげな会話。

名前で呼び合う仲。

意味不明な嫉妬。

いろんなことを思い出しすぎて、私はまた息苦しくなるのを感じた。

「また気分を害してしまったらごめんなさい。でも、どうして話しておきたいんです。誤解を解くためにも」

誤解……？

何を言っているのか良く理解できてない優空に、フィーリアは安心させるように小さく微笑みかけた。

「とりあえず、セルのことから話しましょうか」

## 第二十三話

そう静かに言うフィーリアの目はやはりどこか悲しげだった。

何かがある。

直感的に私はそう思った。

「優空、昨日説明しましたがこの世界には統治者である私たちの力が欠けてしまい、危険な状態であることは説明しましたね？」

「はい」

昨日の魔方阵が描かれている部屋で話されたことを思い返す。

たしか、油断をしたら精霊が眠ってしまったとか何とかだったと思う。

「それが・・・セルさんと関係あるんですか？」

私のもつ小さい脳で考えても、頭の中でセルさんとそのことは結びつかなかった。

「セルが、私の分身として私の中にいるのはその精霊が寝てしまったことが原因なんです」

悲しそうな顔で、でも力強い口調でいうフィーリア。

私は口を挟まずにフィーリアの話を聞くことにした。

「セルは、コルと同じように神官の力を持っていました。神官としての実力ではコルの力には及びませんでした。セルはコルと

は違い精霊の力を外から吸収して一時その力を最大まで上げることが可能でした。簡単に言うなら、セルは精霊の力があつたからこそ神官としての役割をもてたのです。私が言っていることが何を意味するのかわかりますか？」

なんとなくだけど、分かる気がしていた。

口で説明しろなんていわれたら説明するのは不可能に近いけれど、心の中でこんな感じなのだというイメージはあつた。

ただ、それが正解なのかは分からない。

私は、分かるかという問いに対して肯定することも否定することもせず、フィーリアの瞳の奥をじっと見つめた。

そのことの意図が分かったのか、フィーリアは少しだけ口元を緩めた。

「あなたのそのイメージはきつと的を射ていると思います」

それから緩めた口元をキュッと引き締めた。

「セルは、精霊が眠っていくにつれて神官の力を失っていきました。神官の力が失われてしまえば、他の人たちと同じです。セルは消えるしかありませんでした」

フィーリアの口調は力強い口調から徐々に弱々しくなっていく。冷静に喋ろうとしているらしいが、声もかすかに震えている。

フィーリアは・・・セルさんのこと・・・？

そんな考えが頭をよぎった。

しかし、昨日の夜のコルとの会話がある。私はその考えを取り払った。

「しかし、幸いにもセルにはもとの神官の力がありません。微弱なものでしたが、そのおかげで消えてしまうことはありませんでした。しかし・・・」

「姿を維持することはできなかった・・・？」

私の言葉に、フィーリアは静かに頷いた。

「力が微弱すぎたのです。精霊の力で補っていたこともあつてもとの力が衰えてしまっていたのです。セルは消えなくてもそのまま弱っていく危険がありました。ですから私の中に取り込んだのです」

フィーリアは言葉を切り、自分の胸の辺りを優しくなでた。それから強いまなざしで私を見つめた。

「私は、この世界を取り戻したい。そして・・・セルを取り戻したい。優空にとつてはこれから危険なことがあるかもしれない。それでも・・・」

必死に、そして静かにフィーリアは懇願していた。

先ほど取り払った考えがまた頭を掠める。

「フィーリアは・・・セルさんが好きなんですか？」

考えるだけに留めておこうと思った考えは口から抜け出しフィーリアへと届いた。

フィーリアは私に今まで見た中で一番優しくて壊れてしまいそうな



笑顔に向けて言った。

「私が生涯愛するのは、セルだけです」

私に向けられるフィーリアの力強いまなざしは嘘をついてはいなかった。

本当にフィーリアはセルのことが好きなのだと、優空は確信した。

でも・・・それじゃあ、昨日のコルとフィーリアの会話は・・・？

私は納得できなかった。

じゃあ、昨日の夜のことは何だったの？

私の思考を支配するのは醜い疑い。僅かな嫉妬心。

「昨日の夜のことは誤解です」

フィーリアが静かに言った。やはり私は顔に出てしまう性格らしい。

「誤解って・・・どういうことですか？」

高ぶりそうな気持ちを抑えながら、フィーリアと同じように静かにきいた。

はい。フィーリアはそう小さく頷いた。

「優空は、私があのおねだりをコルと話していると思ったのですよね？」

「だって、そうじゃないですか？あの部屋にはフィーリアとコルしかいませんでした」

部屋を覗いたとき、確かに二人以外の人影なんてなかった。だから、フィーリアはコルと話していないとおかしい。

「貴女はコルと話しているときからあそこにいたのですね。コルの失言に気を悪くしないでくださいね。でも、そのときから貴女がいたなら、やはりコルと間違えたのも納得がいきます」

「間違えたって……。確かに、私は……」

「ええ。優空が私の部屋を見たときは確かにコルと二人でした。ですが、その後は違います。ほんの少しの間でしたが、コルは退室をしていました」

そんなのは変だ。コルじゃなかったとするなら、誰かが部屋の中へ入らないといけない。

でも部屋への入り口には私が立っていた。  
ほかにあの部屋への入り口があるわけであれば誰も入ることができ  
るはず。。

「あ……」

いた。一人だけ、それが可能な人が。

## 第二十四話

フィーリアを見ると、もうわかったでしょう？とでも言うように私を見つめていた。

あの時、ドアなんて使わずに入れた人。

私には一人しか思い浮かばなかった。

「セルさん・・・ですか？」

不安げにそう聞いた私に、フィーリアは静かにいわずいた。

でも・・・。

フィーリアの言っていることは信じたかった。

昨日の妙な嫉妬のせいで、ただでさえ自己嫌悪に陥りそうなのに、これ以上人を信じられなくなるのは嫌だった。

それでも、私はフィーリアが本当にセルと話していたのかを疑ってしまう。

嘘をついているんじゃないか。

そんな気持ちで心を支配して、純粋な考えを出来なくさせていく。

・・・だって。

私は耳の奥に残る、フィーリアを呼ぶ声を思い出した。

少し小さく、恥ずかしそうにフィーリアを呼ぶ声。

それはコルの声だった。

「・・・まだ、納得が出来ていないようですね」

小さくため息をしながらフィーリアは言った。

そのため息は、私に呆れているものではなくて、どちらかというとフィーリアが自分自身に向けてついたものだった。

「だって……。あれは、コルの声……。でした」

フィーリアの目の奥をじっと覗き込むようにして確信を持った目でいう優空に、フィーリアは少しだけ、ほんのりと笑った。

「これは・・・聞いたほうが早いのかもかもしれませんね」  
「・・・？」

フィーリアの言いたいことが分からない。

聞いたほうが言い？何を？

セルさんの声のことを言っているのかな・・・？  
でも、さっき聞いたし・・・。

『光栄です』

そう言ったセルの声を私は頭の中で再生する。

コルの声に似てなくもないけど……。コルよりセルさんのほうが大人びている声だし。

疑いがある眼差しで、フィーリアを見つめていると突然後ろから声をかけられた。

「おい」

振り向かなくても誰だかわかる。  
この偉そうな言い方は、コルだ。  
迎えに来てくれたのだろうか？

「コ  
」

慌てて後ろを振り向いた私は、言葉を失った。  
振り向いた先にいたのは、コルではない。

そんなはずないよ。だって……今の声は……コルの……。

しかし、目の前にいる人物が先ほどの声がコルのものでないことを示している。

私は、からからに渴いたので小さくその人の名を呼んだ。

「……セルさん」

でも……絶対に、今の声は……っ

信じられなかった。

だが、目の前にいるのは確かにセルで、どこにもコルがいる様子はない。

「わかりましたか？私が言った誤解の意味を」

フィーリアが私の背中に向けて言葉を投げる。

セルに向けていた視線をフィーリアに戻し、どういことなのかと目で問う。

そんな私に、フィーリアはふふつと微笑んだ。

「人という生き物が何かを聞くときは、耳だけで聞いているわけではないんです」

「え??？」

耳で聞いてないならどこで聞いているというのだろうか？

意味がわからないというふうに小首を傾げる私。フィーリアはすぐに私の後ろにいたセルに声をかける。

セルは静かにフィーリアの元まで歩いてきた。

「こちらにいるのはセルですね？」

「え・・・はい」

当たり前のことを聞いてくるフィーリアの意図がわからない。

そんな私をよそに、フィーリアはセルに何か伝えた。すると、セルは私の目を見ると深くお辞儀をした。

「先ほどは無礼な声かけ失礼いたしました」

コルの声ではない。

『光栄です』

そう言ったセルの声だった。

私はチラリと後ろを向く。

もちろんコルはいない。さっき私に声をかけたのは間違いなくセルなのに、私はコルだと思った。あの声は、コルだったはずなのに。再度この場で聞くと、全然違う。

「わかりますか？人は耳だけで声を聞くわけではないのですよ」

フィーリアが静かに言った。

「耳だけではなく、目や頭の中でも声を聞いているのです。貴女は、

先ほどのセルの呼びかけをコルだと勘違いしました。それは、頭の中でセルが大人びた人、もしくは乱暴な物言いをしない人だと思っているからです」

確かに、そうだ。

セルはコルとは違って、大人びて見える。  
優しい言葉遣いや、柔らかな物腰。

子供のように、時々乱暴な言い方をするコルとは結びつかないと思っていた。

「そして、今は目の前にいるのがセルだと認識した上で声を聞きました。コルの声には聞こえないでしょう？」  
「・・・・・・」

私の無言は、肯定としてフィーリアに届いた。

## 第二十五話

「目と頭で聞くというのはそういうことです。目と頭でその人の声を聞いたときと、声のみを聞いたときでは感じ方が違うのです」

「じゃあ・・・」

私は一瞬言葉を切った。

それから、フィーリアを真っ直ぐに見つめた。

「私の勘違いだったと？」

絶対にフィーリアから目を離さないようにその目を見つめた。

嘘を言ったらすぐにわかるように。

しかし、フィーリアもまた私から目をそらさずに頷いた。嘘を言っているようには思えない。

勘違いで嫉妬してたなんて・・・

恥ずかしさを通り過ぎて、自分自身に呆れてしまう。

「・・・・・・・・ごめんね」

フィーリアから視線をはずし、ややうつむきながら謝った。

勝手な誤解で、フィーリアを心の中でなじってしまったこと。疑ってしまったこと。

とにかく謝らなくてはいけないと思った。

私の謝罪に、フィーリアは一瞬驚いた。そしてすぐに、クスクスと笑った。



「大丈夫ですよ。優空は本当にコルが好きなんですネ」  
「えっ!?!」

素っ頓狂な声をあげながら顔を上げると、丁度セルがフィーリアの中に消えていくところだった。

「さあ」

セルが完全に消えると、フィーリアは優しい声で私に声をかけてきた。

「今日からは早速精霊の元へといってもらいます。場所などは道中コルから聞いてください」

言いながら、フィーリアは私に隣まで歩いてくる。

「とりあえず、部屋まで戻りましょう」

私の返事を待たずに歩き出したフィーリア。

しかし、その歩調はとてもゆっくりで、私が追いつくのを待っていているようだった。

一瞬の間をおいて、すぐにフィーリアの隣へといき方を並べて歩きます。

コツコツという足音が響くだけで、二人の間に会話は無い。だが、それが今はなぜか妙に心地よかった。

少しすると、目の前には見覚えのある扉が見えてきた。  
コルの部屋の扉だ。

「ここまでくればもう部屋までいけますね」

「うん。ありがとう」

お礼を言うと、フィーリアは小さく笑ってもと来た道を戻っていった。

私は、そのうしろ姿を数秒見つめたあと、コルの部屋へと近づいた。

「た・・・だいまあゝ・・・？」

扉をゆつくりと開けて中を確認した。

コルはベッドに横になっている。

「おかえり」

私が部屋の中に入ると、コルはベッドから起き上がった。そして、ソファ―に無造作に置かれた2つのバッグを手にとり、片方を私に向けて放り投げた。

「わ・・・わ」

ポスッ

なんとか床に落とすことなくキャッチすることが出来た。

バッグの中を確認すると、丸くてかたい板のようなものが入っているだけだった。

「何これ？」

私はその板を取り出しながら聞いた。

その板は8つの窪みがあって、何かをはめることができるようになる

っていた。

真ん中にはやはりと言つべきか、魔方陣が書いてある。

「精盤<sup>せいばん</sup>。精霊の力が宿るものだ」

「この窪みは??」

「・・・精霊が起きたらおのずとわかる」

コルはそっけなくそれだけ言つと、近くにあつた細いゴムで肩まである髪を束ねた。

「何?」

ジツとコルを見ていると、明らかに不機嫌な声でコルが聞いてきた。

「な、んでもないっ」

慌ててごまかして、話題を変えた。

「あのさ、フィーリアが精霊のところに行くように行つてたけど、どこに行くの?」

「そうだな・・・」

コルは一瞬考え込むしぐさを取つて、ゆっくり言った。

「最初はウェントウス・・・風の精霊のところに行こうと思う」

そういうコルの顔は、少しだけ険しかった。  
自分の荷物を肩にかけたコルは、私のいる扉まで歩いてきて、静かに言った。

「お前が思ってるほど、精霊と会つのは簡単なことじゃない」

私は、コルの目を見た。

真剣な目。

精霊を起こしに行くのは、それほど大変なことなのだとわかった。

「わかんないけど、頑張るよ」

私の返答にコルは優しく笑った。

・・・普段意地悪なくせに・・・こんな顔見ると・・・。

胸がキュッとしてしまう。

『優空は本当にコルが好きなんですネ』

フィーリアの言った言葉を思い出す。

違うよ。私、は・・・別に・・・。

顔を赤く染めながらコルの顔を見つめる。

コル本人は、私の今の気持ちなんて気づく様子もなく、扉を開けて部屋の外へ出ようとした。

出る直前に、コルは私に今までにないほど静かに小さく呟くように言った。

「絶対に、死ぬなよ」

。

それほど、大変なのだろうか。  
死という言葉が付きまとうほど？

「うん」

コルの言葉に、私も小さく頷いた。

## 第二十六話

城に入った入り口まで行くと、そばにフィーリアが立っているのが見えた。

「準備は終わったのですか？」

いつもと変わらない口調で私たちに話しかけてきた。

「はい。これからウエントウスのところへ行こうと思います」

「わかりました。気をつけてください」

それからフィーリアはコルに近づいて、何かを呟いた。それにコルも小さく頷く。

何言ったのかな。

内緒話をされたと言う疎外感が小さく私の胸に生まれた。  
それを見透かすかのようにフィーリアはこちらを向いて先ほどコルにしたように私に近づいてきた。

「コルが無茶をしないように気をつけてください。・・・きっと、精霊を・・・起こすのは簡単なことではありません。細心の注意を払っていただくさい」

「わかりました」

コルにもこういう注意を言ったのかな？  
ホッとした安心と、本当にそうだろうかと言う疑問が半分半分だった。

「あと」

フィーリアは付け足したように言った。

「こんなことでやきもち焼いてちゃダメですよ」  
「・・・なっ」

私の反応を見て満足そうに笑うと、フィーリアはギュッと抱きついてきた。

体からかすかに香る石鹸の香りが心地よかった。

「絶対に、帰ってきてください。もう二度と・・・」

最後まで言葉を続けなかったフィーリア。

しかし、その口調からその先に続く言葉は容易に想像できる。

「うん。絶対に帰ってくるよ」

私もフィーリアを優しく抱きしめて、約束を交わした。

お城からでた私は、コルの背中を追うようにして歩き出した。  
コルはずっと前ばかりを見てこっちを見ようとしてくれない。

「ねえ、コル。ウェントウスでどこにいるの？」

周りは殺風景で、最初の景色とまったく同じ。草木もなければ空も曇っている。お城からだいぶ歩いたことにより、次第に心配になってくる。

だが、コルは私の問いには答えずに逆に質問をしてきた。

「お前、フィーリア様になんていわれたんだ？」

人の質問に答えようよ・・・。

怒り半分呆れ半分。

ため息をつきながらフィーリアに言われたことを口にした。

「精霊を起こすのは簡単じゃないから細心の注意を払ってだつて。

あと　　」

こんなことでやきもちやいちゃダメですよ。

で、そんなこと言えるわけないし。

「それだけ」

無理やりに終わらせると、コルは歩きながら聞いてくる。

「あとに続く言葉は？」

周りは殺風景なものから、高い柱が沢山立っているところへと変わった。

どの柱もヒビが入っていたり、途中で割れたりしていたがなかなか凝った感じの柱だった。

ちらほらと、木らしきものもある。だが葉っぱは全て落ちて、はげていた。

「えー？」



私は聞こえない風ふうを装って周りを見ながら聞き返した。  
しかし、こんなもので誤魔化せるわけもない。

「だから、あとに続く言葉。お前何か良いかけただろ？」

「いーじゃん！それよりコルだって何か言われてたよね？なんて言われたの？」

「別に何も」

「ずるい！私は言ったのに！！」

ブーイングをする優空に、コルは何も言わなかった。

『 何があっても、優空を守ってください。死なせるようなことはしてはいけませんよ』

コルの頭のなかにはフィーリアの言葉が響いていた。  
いつになく真剣なフィーリアの声が、事の重大さをしんとコルに伝えていた。

「コル？」

いきなりコルの顔が怖いくらいに真剣なものになったから、私は心配して声をかけた。

私の呼びかけにコルは返事をしてくれない。

無視していると言うよりは、考え事をしていて聞こえていないと言った感じがした。

「ねえ、コ……っう」

コルをもう一度呼ぼうとしたとき、右頬に鋭い痛みが走った。  
そして、しずくが頬を伝う冷たいような温かいような感触がする。

私がそつと右頬に手を当てるのと、私の異変にコルが振り向くのは同時だった。

「……っお前……その傷……！」

右頬に当てた手が、ぬるりとした液体を捉えた。私は震える手で、それを見た。

それは真っ赤な血だった。

右頬からはまだ温かい血が流れ続け、服を赤く汚していた。

……いつの間に？

コルも私も周りを見た。

周りには柱があるだけで、肌を切るような刃物なんてどこにもない。それでも周りを見回す私の視界に、他のつぶれかけた柱とは違う何かを見つけた。

私の身長より一回り大きい柱の上にどこかで見たことのある黒く汚れた丸い玉がのっていた。

お城の魔方阵が描かれた部屋にあった奴と同じものだった。

「コル。あれって……」

私が言うと、周りを注意深く見ていたコルは顔を上げた。

「目的地に到着。また傷を負う前に走るぞ」

「う……うんっ」

いきなり走り出したコルに置いていかれないように私も駆け出した。体中に冷たい風が当たる。

それと同時に、私の体中に小さな痛みが走った。



## 第二十七話

ちくちくする痛みを感じながら、足の速いコルにおいていかれないように必死に走る。そのせいで途中から左側のわき腹が内部から殴られているかのような痛みが私を襲った。

でも、私は足を止めることはしなかった。

ただひたすらに目の前にある目的の場所である黒い玉の乗った柱を目指して、何かから逃れようとしているかのように足を動かし続けた。

やつとのことで柱のところまでつくと、私は痛むわき腹を押さえながら荒くなった呼吸を整えるのに神経を集中させた。

辺りは風の吹くヒューヒューという乾いた音と、私たちの呼吸の湿った音だけでほかには何も聞こえない。

顔を上げて周りを見ても、目に付くのは目の前にある大きな柱とさつきまで走ってきた道にある白い壊れた柱とその残骸。あとはハゲて栄養がすべて吸い取られた木のミイラがまばらにあるだけ。危険そうなところは見受けられなかった。

安心して肺の中から深く息を吐き出す際にふとわき腹を押さえていた自分の腕に目をやった優空は小さく息を呑んだ。

なに・・・これ。

視線の先にある自らの腕には、先ほどまでは無かった無数の小さな切り傷かできたいた。体の方を見ると、足の部分には腕と同じよう

に傷があり、服はところどころ裂けてしまっている。

「大丈夫か？」

となりで多少荒れた息を整えてながらコルが聞いてきた。

「ん……。なんとか。でも……」

傷のことを言おうとコルを見ると、コルも同じようにあちこち服が裂けてしまっていて露出した部分からは真っ赤な血が滴っている。しかし、当の本人は自分の傷を気にする様子も無ければ驚く様子も無い。私の新しくできた傷を見ても先ほどのように反応することも無かった。

……！

その反応を見て、私は小さく聞いた。

「どうして傷ができたのか知ってるんだよね？」

その問いに、コルは答えようとしなかった。

一瞬、風のせいで聞き取れなかったとかという考えが頭をよぎったが、コルの視線が空中を泳ぐところを自分でも驚くほど五感が鋭くなっていた私は見逃さなかった。

「どうして傷ができたのか、コルは知ってるんでしょ？」

今までに無いほど静かに、そして強くコルに詰め寄った。

ここまで体に傷つけられて何も教えられないのはあまりにも酷い。それに、何かを隠されたままではこれからもつとコルに何かしらの

負担をかけてしまう。

『コルが無茶しないように気をつけて』

フリーリアの声がどこからか頭に響く。

コルはきつと、自分のために無茶はしない・・・と思う。無茶させる原因があるとすればそれは私。

だからこそ、隠し事はされなくなかった。

睨むような鋭い目でコルを見ていると、コルは何かに気づいたようにぴくりとからだを動かした。

そして私を見ると、仕方ないな・・・とでもいうように静かに言った。

「俺も確信があるわけじゃない。こんなことは初めてだからな」

危険は無いはずなのに、神経をあたりに滑らせながらこるが前置きをした。

前置きはいいいから早くいつてよ。

そう思ったが口には出さない。

「これはたぶん・・・風だ」

「風？」

静かに言うコルに、私も少しだけ声の音量を小さくしながら聞き返した。

風って・・・今吹いてるこの風のことだよね・・・。

こんな風がどう傷と関係するのかさっぱりわからない。

「風がこの傷とどう関係あるわけ？この傷、風じゃできないよ？普通・・・」

悪態をつくようにそういうと、コルは、今更？とでもいうようにため息をつきながらいった。

「普通の風ならな」

コルがその言葉を言い終わるか終わらないかのうちに私の体はいきなり目の前にある柱に叩きつけられた。

「・・・つうう」

突然の出来事に抵抗することができはらずも無い。

顔面直撃は免れたものの、直に柱にぶつかった体の左側が今まで味わったことが無いほどに痛い。そのあまりの痛みに前触れもなく涙がこぼれた。

「おいっ！！大丈夫か！？」

すぐにコルが屈んで、壊れやすい何かを触るようにそっと服の上から左の肩に触れた。そして、チツと軽く舌打ちすると、左肩辺りにできた服の裂け目に手をかけて力任せに破いた。

「ちよっ・・・！」

なにすんの！

抵抗しようとしたが、動かすと腕が痛い。

そんな私にかまうはずも無く、コルは左側を方から腕にかけて何かを確かめるように触った。

「・・・折れては無いな」

安心したようにコルがいった。

・・・あ・・・それを確認するためだったんだ。

考えればコルがこんな状況で下心ありで何かをするはずも無い。気が動転してしまっていたとはいえ、抵抗しようとしたことをほんの少し反省した。

コルは立ち上がると、柱から背を向けて私たちが通ってきた無人の道をキッと睨みつけた。

「いるんだろ？出て来いよ」



## 第二十八話

コルの冷静で、怒りの含まれたその声は何もない空間に小さく反響して消えていった。

誰に向かって言ってるの・・・？

コルがにらみつけている道には人影などない。ましてや、生き物のある気配すらない。

私には何がなんだかわからなかった。

「隠れても無駄だ。出て来いよ」

シンとした空間に向かって、コルはもう一度言った。

先ほどよりも大きな声で、強く。

すると、突然道の真ん中に小さな竜巻ができた。その竜巻はゆっくりと宙に浮き、立っているコルの目線と同じ高さでぴたりと止まった。

「何・・・あれ・・・」

私はコルの背中に向かって疑問を投げかける。

コルはこつちを振り返らず、私が竜巻を見る邪魔をするかのように目の前に立ちふさがった。

「お出ましてみたいだな」

「え？」

何がなんだかわからない。

お出まし？誰が？

てか、竜巻が何なのかも答えてくれないし。

私はもう一度竜巻を見ようと、腕を動かさないようにコルごしに道を覗いた。

浮かんでいた竜巻は、私が見たのとほぼ同時に発光して、シャボン玉が割れてしまうようにあっという間に消え去った。

「え」

咄嗟のことに何て言えいいのかわからない。

竜巻が消え去った後に残ったのは小さな少女だった。

2頭身の小さな体に、薄黄緑のウェーブがかかった腰まである長い髪。そして、真っ黒に沈んだ光の無い黒い瞳。

どこにでもいるような・・・とは言えないが、普通の女の子に見えた。

だが、普通でないことはよくわかる。

フィーリアの話ではここの住民はみんな消えたといっていたし、何よりその子は竜巻が消えた場所・・・空中に浮かんでいたのだから。

「誰・・・？」

「・・・」

聞いてみても、少女は暗い瞳で私たちを見つめるだけで何も答えない。

その問いに少女の変わりに答えたのは、目の前で見る邪魔をしているコルだった。

「あれは風の精霊・・・ウェントウス。この傷を作る風を操る本体

だ」

「あれが・・・」

風の精霊・・・。

想像していたものよりずっと人に近い形をしていた。パツチリと開いた黒い目なんて日本人形を思わせる。精霊ではなく、この住人といっても納得してしまいそうなほど人の子供のようだ。

・・・って・・・

「えええ！？精霊！？」

「ああ」

「精霊って、封印されて寝てるんでしょ？起きてんじゃん！-」

どうなってるの？

そんな視線を送った直後、コルが怒ってるような声を出して私に言った。

「俺の後ろに隠れて絶対に動くな！-」

「へ？」

間抜けな私の声を合図にしたかのように、いち早く行動したのは少女・・・ウェントウスだった。ウェントウスは両手を大きく広げ天に向けると、何かをつぶやき始めた。

ウェントウスの声はあまりにも小さく、辺りは風の音以外不気味なほどに静かなのになんていつているのかは聞き取れなかった。

しかし、何かの呪文であることは想像できる。

ウェントウスが呪文を唱え始めたのを見たコルは、右手を天に掲げて左手を滑らかに動かしながら同じように呪文を唱え始めた。コルが呪文を唱え始めたちょうどそのとき、ウェントウスは空に向けていた両手を大きく勢いをつけて振り下ろした。その瞬間、少女の方向からものすごい勢いで鋭い風が私たちに牙を向けた。

私たちに向かってくるあの風が普通でないことくらいわかる。．．．さつきまで体に当たってこの傷を作っていた風なんかとは比べ物にならないくらい強いことも。

．．．あれにあたったら、こんな擦り傷なんかじゃすまない。

心が焦る一方で、頭の中は驚くほど冷静で、あの風に当たればどうなるのかをたやすく想像できた。

だからといって、どうにかなるものではない。

風から逃げることなんて、不可能に近いことなのだから。

「．．．．．っ」

その現実を受け止めたくなくて、ただ迫ってくる風が怖くて、私は目をつぶることしかできなかった。

ビュウウウという鋭い風の音はすぐ近くまで迫っている。

．．．やっ

痛いほど、目をつぶる。

「ポークルム・ウィトレウム」

うるさい風の音の中に混ざるコルのその声はやけに鮮明に私の耳に届いた。

その声が聞こえて一瞬の間をおいた後、ダァンツという何かがぶつかるような鈍い音があたりに響いた。

## 第二十九話

・・・・・・。

鈍い音を最後に、いきなり風が当たる感じがしなくなったことをいぶかしみ、私はゆっくりと目を開けた。  
まず、体を確認する。

よかった・・・傷は増えてないみたい。

私はほっと息をついて、今起こったことを理解するために顔を上げた。

すぐ目の前にはコルがいる。

もちろんコルの前方にはウェントウスが。

ただひとつ違うことがあるとするならば　コルの目の前に現れた壁だ。

いつの間にか現れたその壁が、私たちに向かってくるはずだった風を遮ってくれていた。

「コル・・・この壁・・・」

「・・・今の俺では全詠唱をしても簡単なバリアを張ることしかできない。しかも、その場しのぎの程度だ」

相変わらずウェントウスから目を放さないようにしながらコルが言った。

確かにこの壁は風の強い威力に押されて震えている。破られるのも時間の問題だろう。

「私に、何かできることはある？」

「・・・」

私の問いにコルは答えなかった。

できることは無い。せいぜい足手まといにならないようにじっとしてろってこと？

無言の否定。

でも、何もできることが無いといわれるのは予想がついてた。私には何の力も無いから。

「・・・っ」

小さくコルの口から声がもれるのが聞こえたかと思うと、私たちとウェントウスを隔てていた壁は消え去り、威力の弱くなった風がコルを襲う。

「っあ・・・っ」

コルの腕から真っ赤な血が流れ落ち、地面をぬらした。

壁がなくなつたところへ、チャンスだといわんばかりにウェントウスは攻撃を仕掛けてきた。コルは瞬時にそれに対応して壁を作るが、今度はあっけなく破られてしまった。

コルを襲った風が、消え去りきれない勢いを私にぶつけた。

頬と腕に氷が張ったような冷たさと、続いて焼かれるような熱さが襲う。

もちろんこれだけではウェントウスの攻撃は終わらなかった。

一度風を戻したウェントウスは壁を作り出したコルのように右手を上上げて何かを唱え始めた。小さなその手のひらに小さな白い塊ができたかと思うと、その塊はまっすぐにこちらに向かって飛んで

きた。

塊はコルの頭に躊躇いもなく飛んでいく。

「っ……ポークルム・ワイトレウムッ」

コルは反射的に今使うことができる力で頭一点に集中してバリアを作った。一点に集中して作れば、より強力なバリアにすることができる。もちろんバリアの無いところにあたれば致命傷をおうことは確かだが、この塊はまっすぐに飛んでくることが見て取れたからコルは集中させる方を選んだ。

コルの予想通り、その塊はまっすぐにコルの頭のほうへと飛んできていた。

途中までは。

コルがさらに頭へのバリアへ神経を集中させようとしたとき、その塊はほんの少し軌道をそれ……コルの頭を通り越してしまった。塊が狙っていたのは、最初から私だったのだ。

どうしよう……っ

絶体絶命。私に何をしろというの、この状況で。

コルは塊が私を狙っていることに気づいて対処をしようとしてくれたが、すでに遅い。

塊は私の目の前。

私がそれをよけられるはずもない。

……だめだあっ

私は突然の恐怖に、その塊から目をそむけることができず、自身に



迫ってくるその塊を見つめた。目前に迫ってきている塊が私の前髪へ触れた。

「 プラキドウム」

ピシッという鋭く高い音を出して、その塊は止まった。私の顔との距離は2cmあるかないか。  
塊が触れた前髪の一部が摩擦で切れて服の上に散らばっていた。

・・・何が、あつたの。今。

呆然と、止まっている塊を凝視する。

その塊は突然小刻みに揺れだしたかと思うと、キャッチボールで投げられるボールみたいに緩やかな弧を描いてウェントウスの方へ戻っていき、ウェントウスの足元の地面ではじけた。

「お前・・・」

驚いたように目を見開きながら、コルは声を漏らした。

「今・・・何をしたんだ・・・？」

何をしたか？

その問いに、私が答えられるわけがない。

何もしないのだから。

「私何もしてないよ・・・！コルがやったんじゃないの？」

「今のウェントウスの攻撃から身を守ったのはお前だよ」

コルは首を横に振った。

そして、俺の力はあのタイミングで発動しても間に合わなかったかな、と付け足すようにいった。

・・・今のは本当に私がしたの？

・・・わからない。でも・・・。

私はゆっくり立ち上がった。

ズキ・・・

立ち上がるときに動かした左腕が痛んだ。けど、折れていないのだからそれほど問題ではない・・・と思う。

立ち上がった私は、ゆっくりとコルの隣に並んだ。

「・・・っ、俺の後ろに隠れてろ！」

コルはちらりとこちらに目をやりながら怒鳴った。

その怒鳴り声を見無視して、私はもう一歩だけ前に出た。

コルの言葉を無視したかったわけじゃない。頭で何かを考える前に、体が自然に動いてしまったのだ。こうすることが当たり前かのように自然に。

不思議と私も、体が勝手に動いていくことに疑問は抱かなかった。

なんだろう・・・この感じ・・・。

体の奥が熱くなるような、そんな感じ。

私は目を閉じて、体の奥にある熱をもっと強く感じ取ろうとした。

「・・・っおい！」

ふいにコルが私の右肩をつかんだ。

「危ない！下がれッ」

目を開けると、ウェントウスがまた静かに呪文を唱え始めていた。私はコルの言葉を意識的に無視した。なおもうるさく下がれというコルに、私は言った。

「大丈夫だよ」

確信はまったくなかった。

でも……大丈夫な気がした。

### 第三十話

「・・・勝算はあるのか？」

厳しい口調でコルは言った。

「ないよ」

私は私でいつもどおりの口調で答えた。

こんな返答をしたらコルは怒るんじゃないかなーって思ってたけど、それ以上はうるさく言おうとしなかった。ただ、任せる。と小さく言っただけ。

きつと私の平然とした態度を見て、何かあると思ったんだと思う。あながち間違ってないかもしれないけど・・・正解ともいえない。私は何をすればいいのか、本当に何もわかんないんだもん。ただ、今を信じるしか私にはできない。

「くるぞ」

その声に、私はウエントウスを見た。

呪文の詠唱は終わったのか、じつと私を見つめている。

だが、まだ攻撃の機をうかがっているようで攻撃はしてこなかった。

「コル」

「なんだ？」

小さくコルを呼ぶと、コルはすぐに返事をした。

「バリアって、私にかけることできる？」  
「ああ」

コルは少しだけ声のトーンを落とした。  
私は何をするのか見当がついたのかもしれない。

いや・・・さすがに見当はついてないかな。私が行動に出るのだから可能性をいろいろ考えてただけかもしれない。  
だって、私だって自分がどう行動するかわかんない。  
保険のためにかけておいてほしかっただけ。

「私にかけてくれないかな？」  
「・・・」

コルの返答はなくて、ただ無言。

「無理ならいいよ。私だって、自分がどう行動するのかわかんない。その保険でかけてほしかったただけだから」  
「え・・・」

呟くように口から漏れたその声は、自分がどう行動するかわからな  
いということに対しての疑問や驚きを含んでいるように感じた。

どういう意味だ？

こんな感じで。

「わかった・・・」

ふいに、コルが答えた。

続いて、私の体はあたたかい何かに包まれた。あのガラスのようなバリアだった。あたたかいと感じたのは、冷たい空気が当たらなくなったかららしい。

「無茶はしないでくれよ」

その声はどこか苦しくて、私も胸が苦しくなるのを感じた。

「うん」

私が返事をした3秒後に、ウェントウスは攻撃を仕掛けてきた。それと同時に、私は走り出していた。逃げたわけじゃない。向かっていった。ウェントウスに向かって、まっすぐと。

「・・・!？」

コルの驚いたような声が聞こえた気がした。無茶はしないっていった3秒後に、無茶な行動に出たんだからそんな反応するのも無理ないのかもしれない。

ダアアン…

「・・・っ」

風がバリアに当たった衝撃が私を襲った。一瞬体制を崩しそうになったが、何とか転ぶことはしなかった。

だが、その衝撃でバリアは壊れてしまった。私の肌には冷たい空気が当たるようになり、小さな切り傷ができていく。

それでも私は走り、すぐにウエントウスの目の前まで行った。  
もともと、それほど距離が離れていたわけじゃないけど、私に向か  
って吹いてくる風のせいで長い距離を走ったように足に疲労感があ  
った。

「・・・・・・・・」

ウエントウスは私が目の前に立つても何の反応も見せなかった。そ  
の態度は反応するという感情が抜け落ちたような・・・まるで人形  
だった。

また大きな攻撃をされたら、生身の私は敵わない。

「ウエントウス・・・」

私は小さく彼女の名前を呼んだ。

呼んだというか、彼女の名前が自然と口から漏れたというほうが正  
しいかな。

名前を呼ばれたウエントウスは、やはり反応を見せなかった。それ  
でも、一瞬だけピクリと体が震えた気がした。

そんなウエントウスの小さな体に、私はそつと触れた。  
とたんに私の口からは言葉が紡がれていく。

「　　汝の囚われし自然の力」

知らない呪文。

だけど、知っている呪文。

「我の前へ解き放て・・・リーベル」

言い終わると、私が触れていたウェントウスの体から黒い煙のようなものが姿を見せた。

私はすぐにウェントウスの体から手を離すと、煙を凝視した。

その黒い煙は、蛇のように一瞬うねったかと思うとあっというまに空高くに浮かび、一瞬のうちに消え去ってしまった。

あの煙・・・なんだったんだろ・・・？

ひとつの疑問を胸の中で考えていると、後ろからこっちに向かって走ってくる気配がした。その気配は私の隣で止まった。

もちろん、気配の主はコルだ。

「お前・・・」

コルは言葉が見つからないように、黙ってしまった。

重たい沈黙の中には、私とコル。そして力なく両手をぶら下げて浮いているウェントウスだけ。

何か話そうとしたけど、私も何をいつていいのかわからない。

冷静になって、私がいった言葉を考えるとわからないことが多すぎた。

囚われし力？

解き放つ？

力が足りなくて、眠ってしまったただけのはずでしょ？？

胸がそんな疑問でいっぱいでぐちゃぐちゃでこっちから話しかける気力がなかった。だから沈黙。

「・・・ん」



そんな沈黙を破ったのは、私ではない。しかし、コルでもなかった。  
残るのは……

「あ・・れ・・？」

声の主はウェントウスだった。  
状況の飲み込めていないような目で私とコルを交互に見ている。

「コルと・・・・・？」

私たちを行ったりきたりしていた視線は、私に向けられて止まった。

「レー・・・ギス・・・様？」

「あ。えつと・・私は・・」

いきなり話し出したウェントウスにしどろもどろになりながら訂正を入れようとすると、訂正するよりも早くウェントウスが私に抱きついてきた。

「レーギス様！生きていらしたのですね！！」

お母さんにすがりつく子供のように小さな体をいっばいに広げている。

こんなふうになると、別人だというのが躊躇われてしまった。

「ウェントウス」

そんな私を見たコルが、やっと声を出した。  
私が訂正できなかったことを彼女に伝えるために。

「そいつはレーギス様じゃない。レーギス様は・・・死んだ」

### 第三十一話

「死んだ・・・？」

沈黙が襲う前に、口を開いたのはやはりウェントウスだった。信じられないという口調で、ウェントウスは私を見つめた。

「私・・・違うの」

いきなり子供のように無邪気になったウェントウスを傷つけないように言葉を選ぼうと思ったけど、口をついたこの言葉は結果ウェントウスを傷つけてしまった。

「でも・・・どこからどう見ても・・・レーギス様では・・・！」

ウェントウスは首を振りながら、事実を受け入れようとはしなかった。

その目には、涙が浮かんでいた。

コルは、それでも嘘をつくことなく事実を話した。

「ウェントウス・・・レーギス様は確かに死んだ」

確実に傷つけてしまう内容。

レーギスとウェントウスがどれほどの仲だったのか、私にはわからないけど・・・。ウェントウスの反応を見る限りでは、少なくともウェントウスはレーギスを慕っていたことがわかる。

コルはその内容を、オブラートに包むようなことはせずに、ただその事実のみを伝えた。

でも、コルはいじわるとかそんなので言ってるんじゃない。

だって、すごくつらそうな声だったから。

「ここにいるのは、優空。レーギス様の生まれ変わり」

「優空・・・？」

確認するように、ウエントウスは私を見た。

「うん。私は・・・優空」

「優空・・・」

落ち込んだ色を隠せないウエントウスに、なんて声をかけてあげたらしいのか私にはわからなかった。

励ましの言葉なんて、本当に落ち込んだ人の前では紙のように薄いもの。

だからって謝ったら、逆にもっと落ち込ませてしまうかもしれない。弱い私には、ウエントウスがコルが話し出すのを待つことしかできなかった。

「優空様・・・」

唐突に、ウエントウスが私を呼んだ。

様をつけられると、なにかくすぐったい様な感じがしてしまう。

「優空でいいよ。何？」

「ごめんなさい・・・」

何がごめんなさい？

何で私が謝られるの？

私の頭に浮かぶクエッションマーク。

「・・・攻撃のこと・・・わかってても、止められなかった」

悲しそうにウェントウスは言った。

「ごめんなさい、と言ったのはさっきまでの攻撃に対してのものらしい。」

考えると妙だ。

今のウェントウスはさっきまで私たちに攻撃していたウェントウスとは明らかに雰囲気の違いすぎている。

「大丈夫だよ。でも、どうして攻撃なんて・・・それに、止められなかったって・・・。そもそも、精霊は眠ってるんじゃないの？」

優しく頭をなでながらそう質問すると、ウェントウスは驚いたように目を見開き、ひどく困ったような顔をしてコルを見た。

「その話はまた後にしよう。とりあえず、フィーリア様に報告に城に戻らなくちゃな」

私の質問を後回しにされたことはちよつと軽くムカツとするけど、いつまでもこんなところにはいたくないし。帰るのが優先かな。

お城に戻ったら無理にでも聞き出せばいいし。

「はい」

コルの言葉に、私は小さく返事を返した。

「あ・・・優空様、待ってください」

帰る発言をした私たちに、慌てたようなしぐさをして、ウェントウスが口を開いた。

「これを」

そういうと、ウェントウスは自分の胸に両手をぎゅっと数秒当てた。そして、ゆっくりと前へ差し出す。

差し出されたその小さな手の中には大きなビー玉サイズのエメラルドグリーンのガラス玉のようなものが握られていた。

「これ何??」

受けとりながら聞く。

エメラルドグリーンの玉は澄んでいて、綺麗な色をしていた。太陽にかざせば光るかなと思って空に向けたが、どこを向いても空は灰色。太陽はなかった。

「それは私の力を凝縮したものです」

「んー。で、これをどうすればいいのかな?」

太陽のない空を恨めしげに見つめていた私は、空から目を離しながら聞いた。

ウェントウスが質問の答えを口にする前に、コルがバカにしたように口をはさむ。

「お前精盤もってんだろ?」

「あー」

私はかばんから精盤と呼ばれたものを取り出した。

ウェントウスからもらった玉をそっと近づけると、磁石のN極とS極が引き合うように、その玉は勝手にひとつの窪みへとその身を納めた。

ザアアアアアアアアア・・・・

直後、強い風が私たちの近くに吹いた。でも、体に傷がつくことはない。心地のいい風だった。

その風はウェントウスがいるほうからではなくて、私の後ろから背中を押すように吹いていた。

腰までの髪が風と戯れる。

そんな自分の髪を片手でゆつくりと梳きながら私は振り返った。

振り向いた先には、あの大きな柱。

フィーリアと最初に会ったところに置いてあった柱とおんなじ黒い玉の乗っていたあの柱。

でも、明からに違う箇所があった。

「あの玉って、黒かったよね？なんで・・・」

柱に乗っていた濁った黒い玉は、精盤に納められている玉と同じようにエメラルドグリーンに変わり、優しい色を奏でていた。

## 第三十二話

「あれが、あの柱の本来の姿なんだよ」

コルが言った。

その口調は遠い昔を懐かしむような、それでいて悔しそうな熱のこもったもったものだった。  
気のせいかもしれないけど。

「でも何でいきなりかわったの？」

さっきまで黒いもののはずだったのに……。

「精盤に玉をはめただろ？」

「うん」

手の中にある精盤に目を落とす。

8つあった窪みのひとつにはウェントウスにもらった玉が納まっている。

「その精盤は簡単に言えばこの世界の力の源なんだ。はめた玉と同じ能力を共有するものが反応しているんだよ」

「へえ……」

分かった気がする。うん。たぶん……。そういうことにしておく。

「ようするに、ここに玉をはめたから同じ能力を共有してるその柱が反応したってこと??」



「簡単に言えばな」

コルは一呼吸ついたあと、何かに気づいたのか険しい顔をしてあたりを見回した。

あたりは何も変わっていない。

柱の玉の色が変わったこと意外は・・・だけど。

「おかしいな」

「何が？」

私も同じように見回してみたが、おかしいところなんて見当たらない。

まあ、私がどれだけ注意深く見ても何に注意してみればいいのかわかんないんだから気づくはずも無いわけだけど。

「ウエントウスは気づいているか？」

「はい。ここは私の聖地ですし・・・」

躊躇いがちに小さくウエントウスは言った。

私だけが気がついてないのか・・・。

微妙に少しくやしい。

・・・て、ん？聖地って？？

「聖地って言うのは精霊個々に与えられている守るべき聖なる土地だ」

「なっ・・・！」

ため息混じりに説明を始めるコルに、私は驚きで声を上げてしまった。

声に出してた!?

私は意味無いと分かっている、反射的に両手で自分の口をふさぐ。

「お前の考えることなんてバカでも分かる」

コルは鼻で軽く笑いながら失礼なことを言ってきた。

「あー。じゃあ、コルはバカなんだね!」

私も負けじと言い返す。

今のと言いつ争いの勝負は引き分け。先制点を取るべくもう一度口を開けかけたとき、横からくすくすと小さな笑い声が聞こえた。

ウェントウスだ。

そうだ。ここには私たち以外にも人はいた。人……ていうか、精霊だけだ。

とにかく第三者がいたことを忘れていた。

今のやり取りを見られていたと思うと、いきなり恥ずかしくなり顔が染まった。

その様子を見て、またウェントウスが笑った。

……さっきまでの落胆は無くなったわけだし、よしとしよう……。

「そろそろ本当に城に帰るぞ。フィーリア様に報告をしなければいけない」

コルはふう……と息をついて歩き出した。

ため息をつきたいのはこっちだって。よく分かんない世界で頑張ってるのにい……。

てか、質問またスルーかよ！

「ちょ……おかしいところってどこさ！」

「あとで話す」

こちらをチラリとも見ずに歩いていくコル。

絶対に嘘だっ！

そう思ったけど、けんかしてても仕方ないし、結局最後に負けるのは目に見えてるわけで……。

「行こっか」

私はウェントウスに手を差し伸べた。

差し出した手に小さな手が触れる。

あたたかいそれを私はゆっくりと握り締めた。

空中に体を浮かべるウェントウスを引っ張るようにしてコルの元まで走った。

「ねー。コル。これってまた歩くの？」

「他にどうやって帰る？」

「最初にお城に行ったときみたいにワープみたいのを……」

「危険すぎる」

融通の利かないやつめ……！！

あの時は嫌がる私を肩に担いで無理やりやったくせに……。

ぷーっと頬を膨らませると、最初に言葉を交わした時のような口調でウェントウスが言う。

「優空様！よければ私がお送りしましょうか？」

「え・・・できるの？」

「はいっ」

言うが早いか、ウェントウスは両手を上に差し伸べ小さく呪文を唱えた。

すると、やわらかい風があたりに吹いた。

と。

「ひゃああっ」

「!？」

風が吹いたかと思うと、私とコルの体は空中に浮かび上がった。

最初は驚いていたコルだが、慣れているのかすぐに冷静さを取り戻し空中で体を安定させた。

一方私は・・・

「やーだああっ」

どこに重力をおけば安定するのかまったく分からず、不安定に体を浮かせている。

「これどうすればいいのっ」

安定してない恐怖に半泣きになりながら誰とも無く助けを求める。

すぐにウェントウスがにっこりと笑った。

「大丈夫です！安定して無くて落ちるなんてことはありませんから」

「そういう意味じゃな・・っ」

「お城に向かいますよ」

「いやあぁっ」

### 第三十三話

+++

それから数分もしないうちに私たちはお城へ戻ることが出来た。確かに、ウェントウスが送ってくれたことは助かってる。うん。だってまた同じ長い道のり歩くななんて嫌だったし。だけど・・・でもさ・・・。

「・・・気持ち悪い」

私はこみ上げてくる吐き気を、ぐっと我慢した。数分と言えど、あんな不安定な状態で空中にいたら誰でも具合が悪くなるに決まっている。

まだ吐かずに我慢できている自分をほめたいくらいだ。

「そんなところにしゃがんでないで報告行くぞ」

頂垂れている私を見ながらコルはさっさと歩き出してしまっ。待つと言ったことを知らないのかまったく。

てか、あの余裕な感じが今はむかつくッ

私は自分に力を入れて、ゆっくりと立ち上がる。おなかの中がぐるぐるしているような感じがして実に気持ち悪い。

「大丈夫ですか・・・??」

隣では、ウエントウスが心配そうに眉を寄せてこちらを見ている。

原因を作ったのは・・・。

「だいじょーぶ」

君でしょ、という言葉を読み込み笑顔を見せた。

ウエントウスはその顔を見て口元がほころばせた。

それから私たちは、先を歩いて城に入ろうとしているコルに追いついて一緒にフィーリアのところに向かった。

+++

「おかえりなさい」

最初にフィーリアと対面したあの部屋に入ると、すぐにフィーリアが満面の笑顔で出迎えてくれた。

「ただいま」

私もそういつて笑った。

コルは何も言わずにフィーリアに笑いかけただけ。

絶対に私には向けてくれない笑顔に、小さく嫉妬したけど、私の心はもうあのと時のように乱れてしまうことは無かった。

「フィーリア様。久しぶりです」

ウエントウスはペコリとお辞儀をした。

「おかえりなさい。ウェントウス」

笑いながらウェントウスの小さな頭を優しくなでている。  
ウェントウスも嬉しそうにしていた。

「フィーリア様・・・」

そんな中、和みムードを壊すような低いテンションの声音でコルが切り出した。

「俺たちは、精霊と接触しました。こいつに、もう隠し事なんて無理です」

そう言い、チラリとこちらを見たコルはフィーリアに向かい、全てを話したほうがいいのではないのですか？と付け足した。

コルが言っているのは、たぶんウェントウス・・・つまり精霊のこと。力が足りなくて眠ってるはずの精霊がどうして起きてるのか。私だけが知らない真実・・・。

「・・・そうですね」

ふう・・・と、観念したようにため息をついた。

そして、小さく謝った。

「優空・・・ごめんなさいね。嘘をつきたかったんじゃないの・・・  
ただ、貴女が・・・」

一瞬言葉に詰まったように、フィーリアは口を結んだ。  
そして、一瞬の間をおいたあと口を開く。



「・・・貴女が、怖がるんじゃないかと思って」

フィーリアは頼りない笑みを浮かべながらそういった。

だけど、私には理由がそれだけとは思えなかった。最初に言おうとした言葉をとっさに変えたのだと。そう思えてならなかった。

それに怖がらせないためだとしても、危険を教えてくれなければ最悪の場合死んでいたかもしれない。

でも、それはフィーリア自身がよく分かっているのだと思う。

自身の無いその表情がそう物語っていた。

### 第三十四話

その様子に、コルは気づいているのかと横目でうかがう。

しかし、コルは平然としていて不審に思ってるのか思っていないのか判別がつかない。

「とにかく、精霊たちのことを話しますね」

話を切り出すフィーリアの顔はさっきまでのどこか頼りない表情などではなく、一切の質問を許さないとでも言うような厳しい顔だった。

その雰囲気には私は口を開くことが出来なかった。

それに・・・私の思い過ごしかもしれないし・・・。

今朝、フィーリアと向き合っていた会話を思い出す。

一方的な勘違いでフィーリアを困らせてしまった。あんなことはもうしたくない。

「手短に話しますね」

やんわりとした口調で、厳しい顔のままフィーリア話し出した。

「昨日、優空には精霊眠りに落ちてしまったと説明しましたね」

「うん」

「もう身をもって体験したでしょうが、精霊は眠っているわけではありません。力がマイナスに働き、力に操られてしまっているのです」

「と・・・いうと??」

理解しようとはしている。

私の頭が追いついてくれないだけで……。

フィーリアは小さくため息を漏らした。

……なんかごめんなさい。

「手短に話したかったのですが。仕方ありません。少々長くなりそうですがよろしいですか？」

「はい」

一呼吸おいてから、フィーリアは再び話し始めた。

「まず……優空。いえ、レーギスがなくなる以前のことです。二人の統治者では力が強大になり、この世界が危険になると思われていました。しかし、その考えとは裏腹に私とレーギスは二人でちょうど良いバランスをとれていたのです」

「でも、それは100年の間のこと……だったんだよね？」

昨日の話を思い出す。

確かフィーリアは、100年は統治できていた、しかしそれから異変がおき始めたといっていた。

「はい。ですがそれは統治者の力のバランスが変わったからではありません。……自然の力を持つもの……。その誰かが、力をマインスに使ったのです」

「力を……マイナスに？」

「はい。どんな力にも、プラスとマイナスがあります。力をプラス

に使えばそれは光になり、マイナスに使えばそれは闇になります」

力は使い方によって、毒にも薬にもなるっていうこと・・・だよ。だから、この世界は決められた一部しか自然の力を使えないんだ。以前はいたらしい住人や妖精も同じように使えたら、誰かが悪用してしまう恐れがある・・・から。でも、それなら・・・

「誰が、力をマイナスに使ったの？」

フリーリアの言うことを疑う気はない。

隠し事があるような感じはするけど、いつか話してくれるって信じてるし。

だけど、それなら誰かが故意に力をマイナスに使ったってことになる。しかも、力を使えるのは限られた人のみ。

フリーリアと、コル、セルさん、精霊たち。それから・・・わたレーギス。

その中の誰かがこの世界を壊そうとしている。

・・・信じられない。

私は小さく頭を振った。

本当は信じられないのではなく、信じたくないのだ。

フリーリアたちはもとより、これから会うであろう精霊たちの中にそんな考えを持つものがあるなんて・・・信じたくない。

「それが・・・」

私の問いに、フリーリアは顔を曇らせながら口ごもった。

そして、ちらりと一瞬だけウェントウスの方を見て静かに言った。

「だれがやったのか・・・わからないんです。それが、個人なのか、団体なのかも・・・」

フィーリアは申し訳なさそうにすいません、と小さく謝った。

・・・わからない・・・のかぁ。

誰がやったのかわからないのならば仕方がない。

ほんの少しだけ、誰がやったのか知りたいとは思ったが、フィーリアの口からその誰かの名前が出なかったことに私は安心していった。

「それで・・・。どうなったの？」

重たい沈黙が訪れる前に、私はゆっくりとその先の話を促した。

### 第三十五話

沈黙にならずに話を再開できたことに少しほっとしたように、顔の緊張をほんの一瞬だけ緩ませて、フィーリアは話し始めた。

「……マイナスに使われた力によって、まず、この世界に歪ひずみが生じました。大きなものではなくて、無数な小さな歪です。私とレィギスが統治者としての力をもつてしても、その歪は消えるどころか、増える一方でした。神官であるセルやコルが歪の対応に行ったのですが、それでも歪はあちこちに残りました」

そういえば……コルとセルさんは神官だったんだっけ。

私は昨日のフィーリアの話で神官についての話を思い出す。

歪を塞いだり、その歪を移動に使ったり出来る人。だっけ……？

簡単にまとめるとそんな感じのはずだ。

まあ、歪を移動に使うのは本人のやる気しだいみたいだけど。

「暫くして、歪は増えなくなりました。しかし、今度は精霊に異変がおこりました」

「精霊に……」

無意識のうちに私は横目でウェントウスの様子を伺っていた。

ウェントウスは自らの小さな肩を同じくらいに小さな手で抱きしめ、目を閉じてフィーリアの話を聞いていた。

「はい。私たち統治者と契約を交わしている精霊たちが、契約を破棄したのです」

「契約？」

あまり聞きなれない言葉だった。

契約って・・・約束事を頭よさそうに言いかえた感じのものだよね。契約書とか聞いたことあるし。

でも、この世界と私のいた世界でまったく同じものだとは考えられない。私が変に覚えてる可能性だってあるし・・・。

「契約は、統治者と精霊を繋ぐためのものです」

やっぱりちがったか。

「その・・・繋がりや、精霊たちが切ったの？」

契約を一方的に破棄するのは、裏切りの行為。

他の精霊たちにはまだ会ってないけど、私の知っている精霊・・・ウェントウスが、繋がりやを切るとか・・・そんなことをするとは思えなかった。

破棄したって言う契約が、簡単な優しいものなら子供心にやっちゃうこともないとは言いい切れないかもしれないが、フィーリアの口調とこの話の流れから契約がどれほど重いものかってことが分かる。

・・・そんな契約だから、破棄するのにも相応の何かが必要ってことだね。

それを本当に精霊たちが？

何かの間違いってことは無いの・・・？

「契約を破棄するには、契約の際と同じように儀式をしなければなりません。それ以外の方法で破棄するのは容易なことではありません。相応の強い力と意思を必要としますし……。契約を無理に破棄したことによる精神的なダメージも相当なものです」

精神的な……。ダメージ……。

私は思わず右手を強く握り締めて胸に当てた。

フィーリアの言う精神的なダメージが、どれほどのものかは分からない。

だが、簡単に直るようなものでは、きつとない。

すごく重いものだと思う。わかんないけど……。

「精神的ダメージってどれくらいなのかな？」

「今回のことはいままでにはない異例のことです。ですから、はっきりとしたことは分かりませんが、契約の破棄に生じるものですから強いものだというのは確かです。もしかしたら状況や力によって多少の差はあるかもしれませんが……。大きな差はないはずです」

「そんな大きなダメージを、精霊たちが……。耐えられるの？」

ゆっくりとフィーリアは首を横に振った。

「通常なら、耐えられるものではないと思います。優空の考えているものよりも契約は重く、固いものですから」

「なら……。！」

私は信じたくない一心だったのかもしれない。

こんなに小さなウェントウスが、裏切るようなことをしたかもしれないということ。



だって、あんなに純粹に私の胸に飛び込んできたんだよ？そんな子  
が、裏切るようなことをするなんて・・・。

## 第三十六話

「優空、貴女の信じたい気持ちもわかります」

フィーリアは少し俯きながら静かに言った。

「ですが、契約は契約者しか放棄することはできません。儀式をしていないのに放棄されたということは精霊が放棄したと考えるのが妥当なんです」

分かりますね？と、付け足す。

頭の中の整理がつかず、フィーリアが何を言っているのかさえ理解するのが容易ではなかったが、私はそれでも一度だけ頷いた。もちろん精霊を疑ったわけじゃない。

ウェントウスは・・・精霊は裏切り何てしていない。

私はそう信じてる。

なんで、会ったばかりのこの子をこんなふうに信じられるのか自分でも分からなかった。でも、隣にいるウェントウスをみれば、そんな気持ちになるのだ。

「安心してください。私はあくまでも可能性の話をしているんです。ですから、ウェントウスには少し質問に答えていただかねばなりません」

フィーリアの目が、再度ウェントウスへと向けられる。

小さく頷きながら、ウェントウスの目は開けられた。その小さな瞳

には少しだけ困ったような感情が宿っていた。  
フィーリアは手短かに、今一番聞かなくてはならないことを率直に口にした。

「ウエントウス、あなたが契約を解除したのですか？」

その質問が来ることを分かっていたのか、ウエントウスは表情を変え、ることなくその問いに答えた。

「・・・わからない」

それは蚊の鳴くような小さな声だった。しかし、ウエントウスは何かを隠しているふうではなく、堂々とそう言った。

その答えに、フィーリアは一瞬ひどく悲しそうな顔をした。

でもそれは私の見間違いかと思うほど本当に一瞬ですぐにもとの表情へ戻り、続けてウエントウスに質問をする。

「分からないとはどういうことですか？」

「覚えてないのです・・・。何も・・・」

「覚えてない？」

「はい」

フィーリアの何気に強い口調の問いかけに、ウエントウスは躊躇いなく答えていった。やはりその小さな瞳から困ったような感情が消えることはなかったが。

「では、どこから覚えているのですか？」

質問の仕方を微妙に変えた。

ウェントウスは少しの間口をつぐみ、考えるしぐさをとった。

「……はつきりとした意識が戻ったのはレー……優空様が私に力を使ってからです。それ以前のことは長い夢を見ているようにぼんやりとしたもので……。その中でも思い出せるのは……」

口を閉じ、ウェントウスは顔をゆがめた。

「私が……コルや優空様に強い力を使っていたことだけ……」

話を聞いたフィーリアは目をほんのりと見開いていた。  
驚きを隠せていないようだ。

「フィーリア……。ウェントウスの言っていることは本当だと思うよ……!!」

黒いもやが体内から出て行った直後の状況を把握していないようなウェントウスの顔。暫くして暗い表情で謝ってきたときの泣きそうな声。

自分の意志で私たちを襲ってたならこれが全部嘘って事。そうとは思えない。

私の声が聞こえなかったのか、無視しているのか。フィーリアは変わらずウェントウスと向き合っていた。

その視線はウェントウスを向いてはいたが、見ているかどうかは分からない。

考え事に夢中になっているようだった。

「フィーリア？」

「え？・・・あ・・・」

私が声をかけると、ハツと我に返ったフィーリアは最後に、これまでの話に嘘はありませんね？と問いかけた。  
ウェントウスは頷く。

とりあえず、これ以上のことはウェントウスは知らないようだった。

### 第三十七話

誰かを疑うような、張り詰めた空気はフィーリアが質問を終えるとともに少しずつ回復していった。

あとは・・・コルやウエントウスの言っていた聖地の違和感と、今までの詳細を報告して終わりかな。

フィーリアが本当にウエントウスへの疑いを拭い去ってくれたのか、私には分からない。

でも、信じたたって気持ちは同じのはず。  
だから、無意味に大丈夫な気がしていた。

「フィーリア様、俺たちから報告したいことが」

場が落ち着いてきたところを見計らって、コルがフィーリアにそつと声をかける。

フィーリアはやはり考え事してたのか、一瞬反応が遅れたが、なんですか？と返した。

「ウエントウスのいた聖地のことです」

「聖地が・・・どうしたのですか？」

「以前調査したとき同様、聖地の契約も破棄されているせいで荒れ果てていました」

「はい。それがどうかしましたか？」

「ここへ戻る前に、風の聖地の契約を済ませてまいりました。ですが、聖地は依然変わらぬままです」

風の聖地の契約？

コルの話を聞いていた私は首をかしげた。  
ここに住んでいるコルやフリーリアたちには、それだけでわかるの  
だろうけど、私は部外者。知らないことが多すぎる。

「ねえ、コル。聖地の契約って・・・」

まだどこかに私のどこかに残っている、子供心の単純な好奇心。  
もちろん、今後のこともふまえて聞いておきたかったってのもある  
けど、このときはどちらかと言うと好奇心での知りたいという気持  
ちが強かった。

「・・・」

本当に小さくため息をつくコル。  
ひとめで呆れていると言うのがとてもよく分かる。

知らないんだから仕方ないじゃん・・・！

ぷくう・・・と、頬を膨らませると、ウェントウスがわき腹をつつい  
てきた。

「優空様、聖地の契約というのは精霊の力を解放して決められた聖  
地と繋ぐことです。優空様は、私の力を解放してくださいました」

一瞬何のことか分からなかったが、たぶん、私がウェントウスに向  
かって言ったあの言葉のことだろう。私の口から勝手に出たあの言  
葉が、解放の呪文だったのだろう。

「それから私が風の玉を渡したでしょう。それを精盤にはめ込みま

したよね？」

「うん」

精盤は私の持つてる袋に入ってる。  
そのひとつに、私は確かにはめた。

「それが聖地の契約です。その土地と同じ属性をつかさどる精霊と、  
守るべき場所を繋ぐものが聖地の契約なのです」  
「なるほど・・・」

ついさっき、私がやったことが聖地の契約だったんだ。

・・・てことは、あれか。

今回が風の聖地の契約だったわけで。窪みは後7個あるんだし・・・。

危険な目には後7回あうって事・・・？

笑えない冗談。・・・冗談になれば本当にいいんだけど。

「それは確かにおかしいですね」

「何がおかしいの??」

さつきから疑問に思っていたひとつのこと。

私はこの世界の法則とか、いろいろ知らないわけだからフィーリア  
たちが変だ変だといっていることの、何が変なのか分からない。

「ええ。聖地というのは精霊が守るべき土地のことをさすわけですが、  
普通その土地の守護精霊・・・つまり、今回はウェントウスな  
わけですが、その精霊と契約を結べば聖地は精霊の力を得て元通り  
に戻るはずなんです」



「へえ・・・」

「優空は、壊れかけたこの世界しか知らないからわからないかもしれませんが、聖地というのは元はとても素晴らしい場所なんです。そうですね・・・神殿・・・といったほうが、もしかしたら分かりやすいかもしれません」

私が知っているのは、たくさんの柱が破壊されて自然なんて何もないような荒れた場所。

だから、フィーリアがいくらもとの聖地が素晴らしいといってもすぐには信じることはできなかった。

「それが、契約したにもかかわらず元に戻らないなんて・・・」

眉を寄せて、難しい顔でフィーリアは何かを考えているようだった。しかし、一瞬体をピクツと震わせたかと思うとすぐに通常表情に戻り口を開いた。

「これは異例のことですから・・・私たちの知識と多少食い違っているのもそうおかしいことはありません・・・戻るのに、時間がかかっているだけです」

「ですが・・・!」

「あなた達は聖地との契約後、すぐにこちらに戻ってきたのですよ？絶対にありえないとはいえないはずですよ」

コルはなおも食い下がろうとしたが、フィーリアは静かにそれを制した。

「こんなことは、取るに足らないことです」

その声は、今まで聞いた中で何よりも低く、怒りのような、不安な

ような、そんな気持ちがかもっていた。

フィーリアは一瞬の間をおいた後、またいつも聞くような優しい声で口を開いた。

「そんなことより、気になることは……。優空、貴女のことです」

### 第三十八話

「わ．．．私？」

話の矛先が、私に向けられた。予想もなかったことだ。

私．．．何かしたかな？

怒られるような事何かしたかな．．．？

悲しい性分なのか、私の思考は悪いほうへ悪いほうへと向かって突き進んでいく。

そんな私の心の中をまたも読み取ったかのように、フィーリアは微笑かに笑った。

「悪いことをしたわけではないです。ただ、お聞きしたいことがあるだけです」

「聞きたいこと．．．？」

いろいろわかんないことだらけの私に答えられることなんて何もないと思うんだけど．．．。

「回りくどく聞くのはやめます。単刀直入にいきますが．．．」

微かに浮かべていた笑みが、一瞬にして姿をくらました。

そこにはただ『威圧』と言う言葉がふさわしいような厳しい顔が浮かんでいた。

「優空、貴女は聖地の契約前に力を使えたのですか？」

「．．．．えつと？」

力・・・？

力って・・・最初に言ってた自然の力とか統治者の力のこと？

「とぼけないでください。使えたのか、使えなかったのか、それだけが私が今欲しい回答です」

厳しい眼差しは緩まない。

信用がないのか、それとも他に思うことでもあるのか。

「使え・・・ないと、思う」

うー・・・なんて曖昧な答え・・・。

自分の口から飛び出た回答の不甲斐なさに肩を落としたが、私が出る回答はどこを探してもこのひとつしかない。

「思うとはどういうことなんです？」

やはりというべきか、フィーリアはそこを聞く。

「フィーリアは、さっきウェントウスが私が力を使ったって言ったからこうやって聞いてるんだよね？」

「ええ」

「あれは私自身にもよく分からないの」

私の正直な返答を聞いて、フィーリアは眉根を寄せて首をかしげた。そしてそれから真相を図りかねたようにコルに視線を移す。

それはたぶん、私の近くで私が力を使うのを見ていた人だから。もちろん私の目もついついコルのほうへとすいつけられる。

「俺もよくは分かりません」

きつぱりとそういった後、ただ・・・と付け加えた。

「あの時、そいつがした行動は、自分自身もよく分かっていないようでした。意識的に使ったというよりも、無意識に使ったようなものだったと思います」

「・・・無意識に・・・」

小さくフィーリアがコルの言った言葉を復唱した。

何か思うものがあるのだろっフィーリアの顔には厳しさが消えない。暫くその憂いの顔を見ていると、フィーリアは小さな声で私を呼んだ。

「・・・優空」

「何？」

「貴女は力を意識的に使ったのではないのですよね？」

「え・・・うん。なんていうのかな、んー・・・」

目をつぶって必死にあのときの感覚を思い出そうとする。

本当はついさっき起こった出来事のはずなのに、まるでずっと昔に起こった出来事のように記憶に薄く靄がかかっていて、上手く思い出すことが出来ない。

それでも記憶をゆっくりと手繰り寄せていく。

「体が自然に動いて、たんだよね。まるで・・・そうするのが当たり前な感じで・・・勝手に・・・」

言葉が終わりに行くにつれて、だんだんと小さくなっていく。

上手く記憶も感覚も思い出せないから、言い切ることが出来ない。

「・・・わかりました」

何が分かったのかももちろん私には分からないが、フィーリアの顔に出ていた厳しさが和らいだところを見ると、何か考えていたことが答えへとたどり着いたのかもしれない。

それをまだ納得できていないのか、本当は答えを今でも思案しているのか、厳しさは完全には姿を消さない。

だからなのだろうか。

厳しさを保つフィーリアの表情は答えが見つからずに悩んでいるというよりも、何かに対しての決意のようなものを感じたのは。

### 第三十九話

私には到底理解できないような何かをフィーリアは秘めている。

そう・・・感じた。

「・・・コル」

「なんですか？」

再び名前を呼ばれたコルはすぐさま返事をする。

「今から契約を始めます。準備をお願いしますか？」

精霊たちとの契約・・・。

私は特にやることは無いかなあ。

「わかりました」

いい終わると、コルは一人で部屋を出て行ってしまった。静かな沈黙が訪れる。重苦しいという感じの沈黙ではなかったのが少し幸いだった。

暫くすると、コルが戻ってきた。

手には金色の小さな長方形をした箱を持って。

「お持ちしました」

「ありがとう」

その箱を受け取ったフィーリアは部屋に描かれている魔方陣の中心にその箱を置いた。すると箱は音もなく開き、中からは白い光が放

出していた。

白い光はまぶしくて……。私は目をしばたかせた。

何が始まるのかなぁ……。？

……。

たぶん、というか絶対に想像のつかないことだろう。こんな夢みたいな現実の世界に私の想像力が及ぶとはとても思えない。

「では……。ウェントウス。こちらへ」

呼ばれたウェントウスは魔方陣の中央へ近づいた。  
そして、フィーリアが次に呼んだのは……、

「優空もこちらへ」

……私！？

いやいやいや、何で私？

瞳でそう問いかけるも、フィーリアは早く来るようにというだけだった。助け舟を出してほしく、コルのほうを見るが。

「……」

俺は関係ない。というかのように、ごく自然に顔をそらされてしまった。

うう……。仕方ない……。

私はいわれるままに魔方陣の中央へと歩き、ウェントウスと見詰め合う形で立ち止まった。



「では、始めてください」

魔方陣の外へ出たフィーリアが私たちに言う。

「・・・何を？」

「ですから、契約を」

「私が？」

「はい。昔から、私よりもレーギスのほうが精霊たちと心が通い合えていましたから」

「いやいや・・・。」

私は・・・レーギスじゃないし。そもそも、契約のやり方を知っているわけがない。

私がそう伝えたと、フィーリアは小さく微笑んで

「大丈夫ですよ。記憶になくても心が覚えているでしょうから」

そう言った。

もちろん私には意味が分からない。

でも・・・。

無意識に力を使っていたあの聖地での出来事を思い出す。本当に、記憶にはなくてもどこかで覚えているのだろうか？

て、あれ？

そういえば・・・私は力を使ったんだよね。

だけど、フィーリアは最初言っていなかったっけ？

精霊を起こさなければ力を使えない、って。

私が起こすとかするまでもなくウェントウスは起きてたけど、今の話聞いてるとなんか契約をしなくちゃ力って使えないみたいだし。

じゃあ、何で？

「始めましょう」

思考をさえぎるように、頭の中にフィーリアの声が響いた。

そのとき、グラリと目の前が回る感覚。

足がふらつき、倒れそうになる体を何とか保ち、私は背を正した。

頭がガンガンとなっている。胸に何かが詰まっているようで気持ち悪い。

吐き気が、する。

「・・・」

そんな状態でも、私の体は動き何かを言う。

自分で言っていることのはずなのに、何を言っているのか分からない。聞き取れない。

視界がぼんやりと霞んでいく。

右手に痛みが走った。その場所に何かが押し付けられてさらに痛む。

「・・・」

足がふらつく。

体が・・・重たい。

「！！！」

誰かの声が聞こえた。誰の声か分からない。  
視界は完全に閉ざされ、私の意識も閉ざされた視界とともに真っ暗  
になった。

## 第四十話

フィーリアが・・・、フィーリア様があいつの名前を呼んだ時何をさせたいのか俺はすぐに分かった。

精霊との契約。

それをさせる気なんだ、と。

無理だ。

俺は本心からそう思う。別に、あいつの力量とかを蔑んでいるわけではない。まあ、力がなさそうなところがあり、俺がいまいち信用しきれていないのは否めないわけだが。

ふいに、困惑気味の顔が俺の視界に入った。

助け舟を出して欲しそうな顔だ。

だが、フィーリア様には頑固な一面がある。俺が何かを言ってもどうにもならないだろ。

「・・・」

故に俺はそっぽを向く。

肩を落とす気配を感じたかと思うと、その気配は部屋の中央 魔方阵の中へと向かう。見ると、ウェントウスと向き合う場所に立ち、フィーリア様のほうを不安そうに見ていた。

・・・フィーリア様は分かっているはずだ。精霊との契約がどれほどの精神力と統治者としての力を必要とするか。

俺から見たらあいつには統治者としての力はほとんどない。確かに風の聖地でウェントウスと戦った時は何らかの力を使ってい

た。何か・・・底力のようなものがあるのだろうが、そう簡単に出せるものではない。

なのに、なぜ？

「大丈夫ですよ。記憶になくても心が覚えているでしょうから」

なだめるようにフィーリア様は言う。

何かが変、だ。

いつものフィーリア様ならこんな無茶なことを言わない。  
あいつが来てから、フィーリア様の考えは分からなくなっていくばかりだ。

何か隠してる？

何のために。

この世界を救ってほしくてレーギス様の生まれ変わりであるあいつを連れてきたんだ。それなのに隠し事をするなんてデメリットしかない。

だが、前科がある。

精霊のことや、この世界の秩序が乱れた理由を偽りで隠していたのも事実だ。

・・・なぜ？

「始めましょう」

凜としたその言葉にはじかれるように俺は顔をあげ、魔方陣の方を

見た。

っ!?

瞬間、自分の目を疑う。

あいつの姿が、ダブって見えたからだ。

頭を振って、もう一度見る。そこにはもちろん一人しかいない。

見間違い、か？

疲れているの・・・だろうか。

俺はもう一度頭を振ってあいつ等の方を見る。

あいつは無表情な顔でその白い右手を動かし、ウエントウスの小さな額に触れた。

契約が・・・始まった。

「 汝、風の精ウエントウスよ。 我は八方の自然を司る統治者なり」

無機質な声はその口から発せられる。

右手が額から離れ、小さな喉元へと滑り落ち、小さく円を描く。

「 我ら今ここに悠久の契約を結ぶ」

足元で光を発していた金色の箱から小さな塊が浮かび上がった。

それは小さな楕円状の刃物だ。 契約時に必要不可欠な聖具・・・キルクルス。

「 契約の証を」

ウェントウスから離れた右手が、戸惑うことなくキルクスの刃に人差し指を走らせる。深く切ってしまったのだろ。白い手は流れ出る赤に見る見る染まっていた。

それを見てからウェントウスも同じように自らの手を傷つける。その手から・・・細く白い血が流れ出す。

互いにその血を一滴ずつ箱へと落とし、向き直り・・・赤い血の流れる手と、白い血の流れる手が重なり合った。

契約の証は・・・互いの血から作る混血。

「汝、我と契約を終え、その力ここに宿す」

ウェントウスの体が淡く光る。その光が完全にウェントウスの体を包み込み・・・その光ごと背後にあった柱と溶け合う。

黒く濁っていた柱の上の水晶は風の聖地と同じ色で遥かに強い色を灯した。

・・・契約が・・・終わった。

本当に、契約が出来た。あいつに。

一部の狂いもなく、完璧に。

まるで・・・最初から全部理解していたかのように。

本当に、体が覚えておたというのだろうか？レーギス様であったときにことを？

「  
」

そのとき、今まで平然と立っていたあいつの体が揺れ・・・足元から崩れ落ちる。

「おいっ　！！」

その体を何とか支える。

支えたその体は微動だにしない。気を失っているようだった。動かないその手から流れ出る血はとどまることを知らないのか俺の服とこいつが着ている服を染めていく。

「・・・フィーリア様。貴女は何を知っているのですか」

背後に立っているフィーリア様に問いかける。

何を戸惑ったのか、俺の声はかすれて小さな声しか出なかった。俺の言葉がフィーリア様に届いたかは怪しい。

「　　コル、優空の手当てをお願いします」

やっぱり届いていなかった、のか。

間をおいて言うフィーリア様にそう納得し深く詮索はしない。聞こえていたとしても、答えることがない、ということが俺の質問への答え。どうせ答えをもらえないのなら、聞こえなかったと解釈をしたほうが・・・フィーリア様に不要な不信を抱かなくてすむ。

「わかりました」

俺の腕の中に身を沈めている体をそつと抱き上げる。魔方陣の外へ置かれている二つのバックを拾い上げ静かに部屋を出た。



## 第四十一話

+++

体が・・・重い。

真っ暗らな視界でそれだけを感じ取る。腕や足が鉛のように重く、自分のものではないのではと思うほどに動こうとしない。

私は今どこにいるの？

その疑問にたどり着いたとき、初めて自分が目を瞑っていたことに気づいた。

閉じていた目を・・・そつと開ける。

途端にまぶしい光が目にし込んできた。

そこは、見覚えのある部屋だった。無駄のないその広い部屋の中央には8つの柱が立ち、その柱に囲まれるようにして床に魔方陣が描かれている。

私はその魔方陣の中心に何をするでもなく、ただ立っていた。

・・・なんで私はこんなところに？

部屋に視線を這わせながら考える。

この部屋に來た経緯が思い出せない。

そもそも、頭の中が真っ白でしつかりと考えることさえ出来ない。

もう一度私は今いる部屋を見回す。

8つの柱にはそれぞれ鮮やかな色のついた丸い水晶が乗っかっている。その光はとても綺麗で優しく、夢かった。

重たいからだが一歩前へと歩き、一本の柱へと向かう。

だが、柱に到着する前に私の足は足元にある何かに躓いてしまった。やわらかいそれに足元がふらつき、ただでさえ言うことを聞かない体はひざから折れ、私はその場にべたりと座り込んだ。

カシャン・・・

同時に隣で何か硬いものが落ちる音が聞こえた。

何の音だろ？

首を音のした方へむけ　　息を吞む。

そこにあつたのは、見覚えのない純白の剣だった。それだけなら、まだ良かったのかもしれない。

すぐそこに落ちているその剣の刃には、真っ赤な液体がついていた。わざわざ確かめるまでもなく、血だと分かった。

何・・・これ・・・。なんで・・・！？

恐怖から来る力を利用して、重い体に鞭打って剣から多少距離をとる。そのとき、やわらかく温かな物体に手が触れた。先ほど私が躓いた、何か。

何かを考えるよりも先に、顔はそれを見ようと動く。そこにあつたのは　　。

「・・・ついやああああ」

絶叫。

幼い頃、ジェットコースターにのって騒いでいたような優しいものじゃない。

自分のどこからこんな声が出るんだろうと思うくらいに、それは鋭いものだった。

それほどに、目の前にあるそれは衝撃的だった。

これは・・・なに？

喉が潰れるのではないかと思うくらいの悲鳴を上げながら、でもどこか頭は冷静にそれを観察する。

いや、本当はそれが何か分かっているのだ。  
それを理解できない頭は、もはや冷静さを失っているのかもしれない。

私の見つめる先にあったそれは二つの物体だった。

一つは、金色の髪を腰までたらしした女性。

もう一つは、青い髪をした男性。男性はまるで女性を庇うように女性の上に倒れていた。

見覚えのあるそれは、赤く染まっていた。

何なの・・・？これは、何？

信じたくない、認めたくない。

もはや悲鳴は止まっていた。目の前のそれを拒絶することのみに脳が働きかけていた。

ギィィ・・・

そのとき、扉が開く音が聞こえた。  
弾かれたように顔をあげる。

そこにいたのは、黒髪の少年。

部屋の中を見て息を呑んでいる少年に声をかけようとして、

誰だっけ。

知っているはずなのに、名前が出てこない。

「おい……大丈夫か!？」

少年は声を荒げながら駆け寄ってくる。私に傷がないことを確認すると、そばにあるそれにを向ける。その顔が、すぐに歪んだ。何を思っているのか、私には分からない。

「なんで……こんなっ……！誰がこんなことを！」

それは私に問いかけられた質問。

そう、私に。

私  
・  
・  
・  
？

私は……誰？

「優空は……見てないのか!？」

優空。優空？

私の名前……？

○

違う。それは私の名前じゃない。  
私は優空ではないわ。

「優空っ」

「違うわ」

私の右手が、何かを握って斜め左上へと持ち上がる。

途端に、降り注ぐ　　赤。

手に納められていたのは・・・赤い純白の剣。

少年の顔が、信じられないとも言つかのように見開かれる。  
少年の名前、今なら簡単に思い出せる。

「ばあいばい。コル」

息のあるそれに向かって、私は持ち上げた右腕を下ろした。  
目の前はただ、赤に染まって

## 第四十二話

+++

「・・・・・・・・っ!!!」

柔らかなベッドの上で私はガバツと飛び起きた。  
初めて経験する異様な目覚め。

すでに頭は覚醒していて、心臓は痛いくらいにつるさく鳴っている。

・・・なんか、嫌な夢を見た気がする。

体はぐっしりと汗をかき、カタカタと震えていた。

何の夢を見たの・・・?

私は嫌だと思いながらも、今見た夢を思い出そうとした。なにか、大切な夢のような気がしたからだ。

だが、どんな内容の夢であっても、それを夢だと認識してしまえば全てが霞んでいってしまう。

私は結局夢の内容はまったく思い出せなかった。

ただ分かることは、とても嫌な夢だったということ。

「・・・・・・・・はぁ」

ため息をついて、右手で頭を押さえる。

「・・・・・・・・っ」

右手に痛みが走った。正確には、右手の人差し指に。暗い視界の中で目を凝らすと、痛みが走った人差し指には巻きつけられた包帯が見える。

・・・覚えのない、傷。  
私・・・何かやったわけ？

記憶をたどってみるが、何かがあったと思われる契約の記憶がどうもあやふやだ。  
ただ、なんとなくこの傷は契約のときについたんだなと頭は理解していた。

「・・・って、あれ」

そういえば、ここはどこ。

私は確か・・・魔方阵のある部屋にいたはずなんだけど。

闇に慣れ始めた目で辺りを見回してみると、少しだけ見覚えのある部屋。

本棚やタンス、ランプなどの一般的な生活用品が置かれているそこは、紛れもなくコルの部屋だった。

何で私はここに・・・。

いや、まあ部屋の準備が出来るまではコルの部屋に寝泊りってことになってはいるけどさ。

ここに来た覚えなんてないんですけど。

でもなんとなく予想はつく。契約が終わってからか、契約の途中なのか。とにかく私はきつと倒れたんだ。それをコルがここまで運ん

でくれたと。ってことは、手の傷の手当てもコルかなあ。  
慣れているのだろうか、包帯は綺麗に巻きつけられていた。

ホント、何でもできるんだな・・・。  
なんか悔しい・・・。

負けず嫌いな性格が、コルができることへ悔しさを感じたが、私には怪我の手当てなんて到底出来そうも無い。  
ここは諦めてもう一度眠りにつくことにした、のだが。

「この服どうにかならないかな・・・」

自分の汗で濡れた服を襟を掴みながらため息をつく。  
濡れた服で寝るなんて、気持ち悪すぎる。それに、明日コルに何を  
言われるか分からない。

そつえば、コルはどこにいるんだろ。

とりあえず、ベッドの上で寝ているのは私だけのようだ。

じゃあ、この部屋の主はどこに・・・。

キョロキョロと見回すと、ソファの上に何かの塊を見つけた。微かに上下に動いているそれはたぶんコルだ。私をベッドに寝かせて自分はソファへいったらしい。

さすがに、倒れただろう人をソファに寝かせるほど意地悪ではないようだ。

足音をたてないようにしてベッドから抜け出して、細心の注意を払いコルへ近づく。

コルは毛布のような布に身を包ませ、スースーと寝息を立てていた。



目をつぶったその顔は少女のように可愛らしかったが、隠し切れな  
い疲れが伺えた。

「まー……。よく寝ていることで・・・」

眩いてから、ブルツと体を震わせる。

濡れた服が空気に当たって体温を下げにかかっていた。

普段から私は健康なほうで、風邪なんてひいたことは無い。だが、  
こつという精神的にも結構弱っているだろう場面では健康を損なう可  
能性もある。

どうしたものかと考えていると、この部屋にシャワーがついている  
と説明されていたことを思い出す。

確か、この部屋の奥へ入って右側だった気がする。

同時にタオル等がある場所も言われていたと思ったのだが・・・説  
明なんてほとんど聞き流していたせいでよく覚えてない。

んー・・・とりあえず洗面所にいけば良いよね。

そこに洗面用具一式そろってれば良いんだけどなあ、と考えながら、  
コルのそばを離れ私は洗面所へと向かった。

## 第四十三話

洗面所と思わしきドアを開けると、まず目に飛び込んだのは真っ暗な闇。

手探りでスイッチを探そうと足を踏み入れたとたん、いきなり明かりがついた。上を見ると、鈴蘭のような形をしたランプが光っていた。

私スイッチ押してないよね？

入り口近くの壁を見るが、そもそもスイッチらしきものがまず見当たらなかった。

センサーが何かかもしれないし、光がつく原理とかもこの世界では何か違うのかもしれない。

私はランプから目を離し改めて周りを見回す。

そこはやや広めの真っ白な清潔感あふれる場所だった。近くにある籠の中にはタオルの類が置かれており、ここが洗面所に間違いはなさそうだ。

見ると、奥にガラス張りのドアがある。

あそこにシャワー設置されているのだろう。

「綺麗なとこだなあ・・・」

思わず声が漏れてしまう。

なんかホテルみたい。私の家とはまったく違う・・・。  
だけど、建物の外見がお城の場所にこんな普通の洗面所があるというのはなんか意外だなあ。

もっとお城という雰囲気の高貴なものだと思っていただけ。こ

れが普通ののかな。

・・・まあ、このお城って昔話とかに出るような豪華な感じじゃないもんね。

別に悪い意味ではない。

無駄が省かれて、清楚な感じが良いと思うのだ。  
いろいろと省かれすぎていて子供の夢を壊しそうなのは確かなのだ  
が。

「お風呂ってどうなってるんだろ？」

私はガラス張りのドアへと目を向ける。

汗でべとべとの体をどうにかするためにシャワーは絶対に浴びたい  
が、出来ればお湯にもつかりたい。  
いろいろとあったせいで忘れていたが、昨日はお風呂に入ってない  
どころか体も洗えていないわけだし。

普通の浴槽があればいいんだけどな・・・。

少しだけ、ほんの少しだけ期待をしながらガラスのドアの前に立つ。  
中を確かめようとドアを開け　　ようとしたのだが、取っ手らしき  
ものが見当たらない。

取れたような後もないし。最初からついて無かったってことかな。  
ていうかどうやって開ければいいのさ。

「コル叩き起こしてやろうか・・・」

・・・やめよ。後で何されるか分かったものじゃないし。

でもどうしよっかなあ……。最低でもシャワーは浴びたい。

腕組をしながら考えていると、ガラスのドアに細く引っかけ傷のよ  
うなものがついていっているのを見つけた。

何これ？

近づいてよく見ると、それはもう何度か目にした魔方陣だった。中  
央に一つと四隅に一つずつ描かれたその魔方陣はこの部屋の扉にあ  
った魔方陣と同じものだった。

確か境界がどのと言っていた気もするが、ここまで何個の描かれ  
ていると神聖なものではなく一種の飾りのように見えてきてしまう。

部屋にはいるときつて、コルはここを叩いてたよねえ。

その姿を思い出しながら、同じようにそこを叩いてみる。

コツコツと硬い音が響き。

何の前触れも無く、突然目の前からお風呂場と洗面所を遮断するガ  
ラスが消えた。

……。あ、開いたってことになるの。これ？

まったく、いったいどんな仕掛けなんだか。

この世界に来てまだ2日しかたっていないはずなのだが、その短時  
間の中でいろいろと私の世界ではありえないようなことを見せられ  
てしまったせいではほど驚くことはなかった。

……。この世界の景色は今のところまったく変わっていないから、

本当に2日経ったのか怪しいところだけど。

消えたガラスのドアの向こうを覗き見るとタイル張りのお風呂場だった。

しかもかなり広い。

服を脱ぐ前に浴槽やシャワーの確認をしようとお風呂場へ移動した。すると、消えていたガラスが現れ、また洗面所とこの場所を遮断する。

あー……。なるほど。

ガラスは誰かがそこを通ったら戻る仕組みになってるんだ。あたりまえか。消えたままじゃお風呂はいれないもんね。気にせず入る人もいるんだろうけど……。私にはそんな羞恥プレイ絶対に無理だな。

そんなことを考えながら浴槽などを見たが、特別おかしいところはない。大きさを除けばいたって普通のものだった。

何故か浴槽にお湯が張っていったが、……。うん。特別気にすることでもないだろう。

「じゃあ、入ろうかな。寒くなってきたし」

私はもう一度洗面所に戻り、服を脱ぎだし　　はたとその動きを止める。

最初は気づかなかった……。というか、気にも留めなかったのだが鈴蘭ランプのしたには大きな鏡が設置されている。

そこに服を脱いでいる自分の姿が映っているわけだが。

問題はそこではなくて、今私が着ている洋服にある。

……。なんで、服が変わってるの。

もちろん着替えた覚えなんて無い。なのに服が変わっている。

誰が服を変えたの。

・・・フィリアだと思いたい・・・けど・・・。コルのやへにいるわけだし、手当てもたぶんコルがやったんだから。

。

・・・うん、深く考えないことにしよ。それが一番だよ。うんうん。

私は鏡を見ないようにして止まっていた手を動かした。

## 第四十四話

服を脱いだ私は浴室に入った。

タイル張りの浴室は誰が掃除をしているのか、真新しい輝きを持っている。汚れているところも見当たらなかった。

私はお湯の張っている浴槽に左手をそっとつけた。熱すぎるわけもなく、ぬるすぎるわけでもない。人肌よりちょい上くらいの丁度いい温度だった。もしかしたら、もっと熱いお湯につかりたい人だっているかもしれないが、私にはこれくらいのぬるま湯が丁度いい。

「さーと。お湯につかる前にシャワー浴びたいなあ」

お湯から手を離し、タイル張りの壁をザツと見渡す。

・・・シャワーが設置されてないんですが？

あ・・・あれー？お風呂って、シャワーがつき物じゃないのー！？

とゆうか、私もさつき気づけばよかったんだ。

シャワーと浴槽を確認したとき、タイル張りの広い室内とすでに用意されてあった浴槽のせいで気が回らなかったが、シャワーを目にした覚えが無い！

因みに言つと、お風呂とかで私が使う一般的な道具が見当たらない。どうなってるんだこは！

「えー・・・。ちょー、どうすればいいのー？」

とりあえず、寒い。

裸だし、空気乾燥してるし。だけど、お湯を浴びる前にお風呂に入

るのはなんか嫌だ。でも、お湯をすくう方法もないし・・・。

どうしようかなあ。

本気でコルをたたき起こしてやろうか・・・。

腕組みしながら考えること一瞬。ふと顔をあげた先にあるタイルが他のタイルと色が違うことに気づいた。

いかにも何かありますぜ！って感じの雰囲気はそのタイルから漂っている。

こうなったら確かめるしかないよね！

私はちょっとした好奇心と、できればシャワーとか何らかの装置であって欲しいという期待でそのタイルに触れた。

ピッ

小さくなる機械音。

え？、と思う暇もなく、浴室のあちこちからお湯が降り注いできた。お湯、というか、細かい霧のような無数の粒が私に向かって落ちてきていた。

その感触は洗いたてのタオルにくるまれているような・・・。いや、もつと柔らかい雲に抱かれているような気分だ。雲に抱かれたことなんて無いけどさ。

微かに石鹸のにおいのするそのお湯は、私の体の汚れを落としていく。抱え込んでいたものも、少しだけ削られていくような気がした。すごく安心して、本当に無意識に口が動いた。

「……………お母さん……」



口から漏れたその言葉に、私は酷く後悔した。

あんな天然なお母さんだけど、あの人は私の大切な人で。だけど、今度いつ会えるのかわからなくて。

・・・会いたいよ。

こんなこと思っても、仕方がないのに。

私は、頭を振り、無駄な考えを振り払った。この世界を助けたいと、一度思っただから今更帰りたいと駄々こねることなんて許されない。

なんとしても、やるべきことを終わらせなくちゃね。

私は自分に言い聞かせるように胸を叩いた。

「いった・・・」

叩いた瞬間、握り締めた右手が痛んだ。見れば、そこには白い包帯。そこからにじみ出る赤いもの。どうやら、傷が開いたみたいだ。

「傷って、血が出てるの確認しちゃうと痛く感じるんだよねえ・・・」

「

もちろん私も例外じゃない。

ジンジンと痛くなってきた。

包帯もお湯に濡れてびしょびしょで、傷をふさぐ役目をすでに果たしていない。このままお湯にあたっていたら、血が流れ出して指を染めていくのも時間の問題だろう。

あー・仕方ない。出るかあ  
ちよつとだけ名残惜しい。私この装置気に入ったのにー・・・。

しかし、血を垂れ流しのままにしておくわけにもいかない。しぶしぶ私はこの降ってくるお湯を止めるためにタイルに触れた。降ってくるお湯の量は次第に少なく　ならない。

「え？あれっ？なんで？？」

タシタシタシッ

慌ててタイルを平手打ちするが、変化無くお湯は降っているままだ。なんで！？

ペシペシペシペシッ

さっきよりも早く叩く叩く。

だが、それでも変化が無い。お湯は同じ量、同じ強さで降ってきている。それと、叩いたせいだろうか。どこからか・・・というか、ガラス戸のあるあたりから冷たい空気が流れ込んでいる。振動か何かであつちがあいてしまったのだろうか。

そんなに強く叩いた覚えないんだけどなあ。

特に気にもせず、タイルを叩く。もしかしたら叩き方に問題があるのではないかと思い、あらゆる角度からタイルに攻撃を繰り返す。

「・・・そこじゃない。右側の壁のタイルだ」

「右？」

見てみると、右側にも色の違うタイルがあるのを発見した。触れてみると、すぐに降ってくるお湯は勢いをなくし、すぐに止まった。

「あー。やっと止まったよー」

ありがとう！

と、言おうとして、止まる。

私つてば、誰にお礼なんていおうとしたの？ いや。そりゃ、タイルの場所を教えてくれた人につてことは分かってるけど。教えてくれた人つて誰よ？

ここの部屋には・・・私と、もう一人しかいなかったわけであつて。恥ずかしい思いを飲み込んで、振り返る。

そこにいたのは呆れ顔の顔をしたコルだった。

顔を赤らめることなく、ただ呆れた顔。乙女の裸を見てるんだからもっと顔赤らめろよ！とセルフ突込みが出来るほどの落ち着きようでこつちを見ている。

・・・セルフ突っ込みのおかげで再確認したわけだけど。

私つて、いま裸なんだよね？

そんでもつて、コルのほうを見てるんだよね？

。

どうする私！！

この状況どうするよ！！

今までで一番ピンチなんだと思うんだけど！ いろんな意味で・・・！！

考えてもこの状況を抜け出す策は出てこない。こんな見つめあいながら考えてる時間があるならコルの脇を通っておいてあるタオルで体を隠せばいいのにも思うがそんな考えがパツとでるほど私の頭は冷静ではない。

結果。

その頭で導き出した答えが。

「いつまで見てんだーーーーっ」

バチンッ

渾身の力でコルの頬を叩くという、後々恐ろしいことになるに違いないものだった。

## 第四十五話

+++

「　　いったつ」

「我慢しろ」

思わず引つ込めそうになった手をコルは容赦なく引き止める。手首を握り締めてくる力が地味に痛い。

あの後・・・お風呂場からなんとかコルを追い出し、私は置かれていたバスタオルで体を巻くことに成功した。不思議なことにお湯で体と一緒に濡れたはずの髪は半分乾いていた。ので放置。

バスタオルを巻いた方がいいが、着替えがないことに気づき外にいたコルにひたすら謝って着替えを用意してもらって、今はベッドの上。取れてしまった包帯を巻きなおしてもらっている。

因みに、コルの用意した着替えはやっぱシンプルなデザインで白やクリーム色がメインのワンピースだった。ここの城は薄い色が好きなのか、こんな色のばかりなきがする。

ワンピースの他に渡されたものは・・・そう、下着。

いや、下着がないと困るのは私だけだね？

「そっいえばさあ」

「何」

黙々と手を動かしているコルに自由になっっている左手の腕を眺めな

がら問う。

「全然気にしてなかったんだけどさ。私って、あの・・・ウェント  
ウスの一件で結構怪我してたよね？全然その形跡すら見当たらない  
んだけど」

「まあな。俺が手当てしたわけだし」

「は？」

「指の手当て完了。もう外すようなことすんなよ」

そう言つて、部屋の明かりを消しもといたソファに戻っていくコル。  
お風呂場でのドタドタで忘れていたが、今は私の世界で言う夜中だ。  
時間がずれてるとか言ってたし、風景も変わんないから確信はない  
わけだけど。

考えている間にコルはさっさとソファに横たわり、寝息を立てよう  
としていた。

「ちょ、ちょっと待ってよ！怪我手当てしたって何さ！」

「ああ？」

怒ってる・・・寝るの邪魔すんなオーラがひしひし伝わってきてる  
よ！？

「いや、だから。コルが怪我手当てしたって・・・。まず手当てし  
た怪我自体ないじゃん！」

「怪我残すなんて無能なことはいねーよ。あんな擦り傷くらい、今  
ある力でどうにかなる」

「神官の？」

「そう」

本当に眠いのだろう。

短く言葉を切った後に、コルは小さくあくびをした。コルにとっては、私のせいで安眠を妨害されたものだから、早く眠りたいのかもしれない。

眠いおかげで、ひっぱたいたことをコルに強く責められなかったのはラッキーだったけど。

「じゃ、この手の傷だって治しちゃえばいいじゃん！」

簡単には寝させないとこ、私意地悪だなあ。

面倒くさそうに私を睨みつけたあと、疲れたように目を瞑り眠そうな声で言った。

「儀式の聖具でつけた傷は今の力じゃ無理だし、神官の力が戻ってもどうにかできるものじゃない」

「これって、やっぱり儀式のときについたやつなんだ」

「覚えてねえのかよ。・・・やっぱり・・・」

「え？なに？？」

「・・・」

小さく続けられた言葉は何だったのだろうか。

あまりにも掠れて聞き取ることができなかったため、聞きなおそうとしたが、これを発した本人はすでに小さく寝息を立てていた。

「もー・・・、ん・・・ふああ」

私もちょっと眠いかなあ。

眠りたいという生理的欲求には逆らえず、私はその場に崩れるよう

にして座り込み、もたれかかるようにして再び眠りの中へと引き込まれていった。



## 第四十六話

+++

優空

どこかで呼ぶ声が聞こえる。  
聞き覚えのある声。ううん。聞き覚えのあるなんてものじゃない。  
この声は……。

。

何……聞こえない。

。

「ん……」

薄っすらと目を開けると、皺になった白いシートが視界に飛び込んできた。私の部屋のものではないことはもう理解している。  
私はその場で何度か瞬きをして、ゆっくりと体を起こした。まだ寝ぼけているせいか、頭の中がぐるぐるとしていて、気を抜いたらまた夢の中に連れて行かれそうだった。

「んー……ふああ……」

両腕を上へ上げ、体を伸ばす。ぽろりと口からあくびが漏れた。

「起きたか」

ソファの方からコルの声が聞こえた。コルは昨日と同じく髪を縛っていて、昨日持っていたバッグの整理をしているところだった。一箇所だけエメラルドグリーンに染まる精盤がチラリと見えた。

「早くお前も仕度しろ。フィーリア様が待ってる」

「あ、うん」

促されて、私はベッドから降りて用意されていた服を着る。昨日来たのと同じようなワンピースタイプの服。コルも昨日と似た服を着ているから、どうやらこの服はこの世界で何かをするときの服装らしい。

着終わると、コルと二人で食堂へと向かった。

すでにセルによって食事が準備されており、各々席についてそれを食べ始めた。

全員の食事が終わったところで、フィーリアが口を開いた。

「昨日はお疲れ様でした。特に優空には、大きな負担をかけてしまつて・・・」

「大丈夫だよ。心配しないでっ」

悲しげな表情をしたフィーリアに、私は慌てて言った。

契約を任命されたのは確かに困ったものの、倒れてしまって逆に迷惑をかけてしまったのだから、お互い様だろう。

そう言くと、フィーリアは微かに笑った。

「そういえば、今日はどの精霊に会いに行くの？」

「今日は精霊の元には向かいません。一度契約をしたら、三日間の時を刻まなければ契約を行うことが出来ませんので」

「契約せずに、精霊だけつれてくることは・・・」

「出来ないな。聖地との契約だって、同じだけ時を刻まなければ無理だ。お前が唱えた力の解放の呪文も時と刻まなければ使えない」

「ということは。」

「三日間は、何もすることがないってこと？」

「じゃあ、その間は私の必要ないわけで・・・家に帰してくれたりは・・・」

「チラリ。」

横を見ると、見たことを後悔するくらいの冷たいコルの視線が私を出迎える。

「ですよー・・・」

「はあ・・・」

私は心の中で深くため息をついた。

「それじゃあ、これから三日間は何をするの？」

「貴女には、ウェントウスの力をマスターしてもらいます」

「・・・えーっと。」

「・・・はい？」

「ウェントウスとの契約が終わったため、風を操る力が私たち統治者に使えるようになったはずです。・・・このように」

フィーリアが片手を前へと差し出すと、その手のひらの上に小さな竜巻が起こった。竜巻自体は小さいものの、そこから吹く風は結構強い。

あんなものが、私にも出せるのだろうか？

「私は操り方をわかっていきますから。優空も力の操り方を学べば使えるようになるはずです」

「でも、」

「悩んでいる暇などありませんよ。これから先は、必ず統治者としての力を使わなくてはいけなくなります。精霊の中で一番温和なウエントウスでさえ、二人に襲い掛かったのですから」

少しだけ厳しくなった口調が、私の様子を伺う。

悩むことは時間をすり減らすだけだ。選ぶ答えはすでに一つしかないのだから。

## 第四十六話（後書き）

この小説はこのままの書き方でいきます（、・・・）キリ  
読みづらかったすみません（、・・・）

## 第四十七話

しぶしぶながらも、フィーリアの言葉を了承した私が連れてこられたところは、その城の地下室だった。もちろん窓も無いし、見たところ電気のようなものも無かったのだが、昼間のように明るい。

当たり前か。お城自体が光ってるようなものだもんねーここ。

まあ、例外な部屋はいくつかあったけど。

私はその地下室に足を踏み入れ、ぐるっと見回してみる。

こんなに必要なのかというぐらいにそこは広かった。学校の運動場くらいだろうか。それともお城の地下室はもとこんなものなのだろうか。

「では、優空。とりあえず竜巻を出してみようか」

「えー……。竜巻ってとりあえずで出るの？」

「いけるはずですよ」

はずってなんだはずって！！

うー……。でも、仕方ない……。

「どうやって出すの？」

「まず手を開いて前に伸ばしてください」

「こう？」

右手をいっぱいに伸ばして、手を開く。私の視界には右手の甲が見えている状態だ。ずっといっぱいに手を伸ばしているため、腕がつりそうだった。すでにぶるぶるしてきている。

「力入れすぎだ。もつと抜け」  
「いたっ」

横で私たちを見ていたコルが、べしつと私の腕を叩いた。  
この人の辞書には女の子に優しくするという言葉は存在しないらしい。・・・いや、フィーリアも女性だからそれはないか。優空<sup>わたし</sup>に優しくするという言葉が存在しないんだな。きっと。

でもおかげで丁度いいくらいに力が抜けたと思う。

コルのおかげじゃないもん。絶対！

「これで、どうするの？」

「手のひらに風が集まるイメージをして、呪文を」

「呪文？」

「はい。見てくださいね」

フィーリアが私に言ったように手を広げて前へ差し出した。

「風の精霊よ汝の力を解き放き我の力となれ トウルボー」

フィーリアがいい終わった直後、差し出した手のひらの前にどこから吹いてきているのか、風が集まり渦を巻きだした。

それを確認してから、フィーリアが前に出した手を素早く高く掲げる。

すると渦を巻くスピードが上がり、地下室中に強い風が吹き荒れた。

ちよっ、ちよっ！！ これスカートなんだけど！！

必死でばたばたと揺らめく裾を掴み、竜巻を見つめる。さっき食堂

で見たものとは比べ物にならないくらいに大きくて強い。

これに当たったら一溜まりもないような気がする。これを精霊たちに使っても、本当に大丈夫なのだろうか。

ふいに竜巻の威力が弱まり、最後に冷たい風がまわりに吹いて消えた。

地下室は何事も無かったように静まり返る。

「こんな感じです」

「こんな感じって・・・」

やっぱりこの住人とはちょっと考え方というか、いろいろずれている気がしてならない。逆にコルたちから見たら私のほうがよっぽど変なんだろうなあ。

・・・はあ。

心でため息をついた後、両手でぺちぺちと頬を叩く。

よし！

私は右手を開いて前に差し出した。

一回深呼吸をして程よく方の力を抜き、手のひらに風が集まるイメージをする。なんだか手のひらが涼しく感じた。

「風の精霊よ汝の力を解き放ち我の力となれ トウルボー！」

。

「「「・・・」」」



・・・あ・・・あれー？

ぴしっと伸ばした手のひらの先には何も出てこない。

フィーリアの出した大きな竜巻どころか、小さな竜巻も、そよ風すらも出てこない。広い地下室中になんとも微妙な空気が漂い始める。

誰かに助けを求めたいものの、あんなに真剣にやって結果がこうなると、恥ずかしくて誰にも目を合わせられない。

というか、空中に伸ばしたままの手をどのタイミングで引っ込めればいいのかすらわからない。

「・・・優空。やっぱりまだもう少し慣らす時間が必要みたいです  
ね」

「そうですね・・・」

伸ばしていた手は力なく落ちた。

本当に私なんかそんな自然の力なんて使えるのだろうか。絶対に無理な気がしてならない。

「コル。少し本気で優空の特訓をお願いします」

「わかりました」

しかもなんか二人は私が落ち込んでいる間に話を進めてるし。

・・・って！

今、少し本気とか、特訓とか、あんまりいい響きじゃない言葉が聞こえた気がするんだけど・・・！？

「それでは優空」

「なんでしょ」

「今日から三日間、頑張ってくださいね」

「特訓ですか」  
「特訓です」

そっいつて笑った後、フィーリアは地下室から出て行った。精霊の力はまだ全部は戻らないが、統治者の力を使って少しでもこの世界が保てるようにバランスをとらなくてはいけないらしい。

フィーリアの後姿は入ってきた場所に消え、入り口はゆっくりと口を閉じた。地下室に残ったのは、笑顔で地獄に落とされた私と、コルだけだ。

少し本気でとか言ってたし、これから三日間もいじめのような特訓があるのかと思うと・・・ねえ。

「それじゃあ、はじめるぞ」  
「おおー・・・」

地下室の中に、きびきびとしたコルの声と力の無い私の声が響いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2393m/>

---

異世界

2011年8月21日17時36分発行